その腐肉を食らえ

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その腐肉を食らえ

【Ｎコード】
Ｎ９４３２Ｒ

【作者名】
Ｒａｉｌ

【あらすじ】
突如としてゾンビが現れ、人を襲いだした。襲われた人間もゾンビとなり、その危機は治まることを知らず人類は存亡の危機を迎えた。
それから一年。ゾンビが徘徊する世界で、俺たちは生きている。奴らを食らって。
しかしようやく築くことのできた日常は、ある女の来訪をきっかけに崩れだし……？
※※※　注意　この作品にはゾンビを食べる描写があります　※

※
※

1、生存者

あいつらのことを俺たちは便宜上ゾンビと呼んでいる。
濁った眼、腐臭を放つぼろぼろの体、鈍い動き。食欲という本能だけで動いて人を襲い、知能は至って低い。そしてあいつらに噛まれた人間はもれなくあいつらの仲間入り。一度あいつらの仲間になっちまうと、もう元の人間に戻ることはできない。多分一度死んでゾンビに生まれ変わっているんだろう。
まさに映画に出てくるゾンビそのものだ。
本来動く死体はリビング・デッドと言うらしいが、日常的に呼ぶには長い。バタリアンなんて言い方をしてたやつもいたが、なんにせよゾンビの方がしっくりくる。

人が想像できるすべての事は起こりうる現実だ、なんて言葉があったが、それが本当だなんて誰が分かったんだろう。昔は映画や漫画、ゲームの中にしか存在しなかったはずのゾンビは、今や我が物顔で町を徘徊している。
俺たちが娯楽として楽しんでいた映画やゲームの中の狂った世界が、今や現実となっているのだ。

そうそう、バイオハザードってゲームを知ってるだろうか。映画にもなったやつだが、あれに出てくるゾンビどもはいわゆる一般的なゾンビ映画に出てくるゾンビとは違うって知ってたか？　俺もすっかりうろ覚えになっちまったが、あれはウィルスに感染したせいで遺伝子が変質して新陳代謝が活発化した人間なんだとさ。新陳代謝が活発になりすぎるせいで細胞の壊死も早くなってゾンビっぽい見た目になってるらしいけどな。

理由はおいおい話すが、今世界のあちこちを徘徊しているゾンビ

どもはそれにかなり近いんじゃないだろうかと俺は考えている。
というのも――

「正也、昼飯狩りに行くぞー」

相棒の恭司が斧を肩に担いで言う。もうそんな時間になったのか。
俺もナイフを腰に差し、得物である金属バットを手に取った。一年前まで甲子園を目指していた俺の得物がバット。なんとも皮肉なもんだ。かつては白球を捉えていたバッドも、今や黒い血がこびり付いてとれなくなっている。

狩りは慎重に行う必要がある。そのためには常に観察と警戒を怠らないことだ。だから狩りの最中に考え事なんてしたりはしない。といっても安全地帯にいれば話は別で、少しばかり考え込んでしまう。
眼下で徘徊するゾンビを見下ろす。ゾンビが現れてからもう一年以上経つが、未だあいつらが腐り果てて動かなくなる様子はない。やはりそれなりに新陳代謝か何かがあるだろう。単なる動く死体であるならば時間が経てば肉が腐り、いつかは原形をとどめなくなるはずだ。それに日本の夏は暑い。アスファルトの照り返しの上に生肉を置いておけば肉はレアかミディアムかウェルダンか。全てのゾンビが靴を履いているわけでもないし、地面がクソ暑い時でもゾンビどもが動きを止めないのはたんぱく質が固まらないよう体温をどうにかして調整しているからだろう。
もしもそれが摩訶不思議でご都合主義なファンタスティックなマジカルなパワーが働いているのが原因だというのならお手上げだが。その場合はいるかも分からない神を呪ってやる。

「おい正也、また考えごとか？　後にしろよ」

俺が足を止めたのに気付いた恭司が戻ってきて言う。

「ああ、悪い」

軽く謝ってから再び足を動かす。一年ほど前はしょっちゅう墜落していた俺だが、今ではひょいひょいと家々の屋根の上を飛び回れるようになった。住民がいなくなった家が多いので老朽化が一気に進んでいる家が多いが、それでも屋根を踏みぬくようなドジは踏まない。

「人間はっけーん。珍しいなー」

恭司が面白そうに言った。

視線の先を見てみれば、縁石を乗り越え電柱に突っ込んだバスがあった。突っ込んでからそれほど時間が経っていないのか、衝突した前方部分からはぶすぶすと黒煙が上がっている。その屋根の上には黄色いワンピースを着た女が立ちつくしていた。二十歳くらいだろう。バスの周囲にはゾンビどもが活きの良い食べ物を求めて群がっている。退路がない女が顔色をなくしているのが遠目でも見て取れた。

どうやら彼女は正真正銘人間のようだ。それもごくごく普通の。

「助けとくべき、なんだろうな」

ため息交じりに俺が言うと、恭司はにやりと笑った。

「今あの子助けたら、俺たちってまさに白馬に乗った王子様みたいな感じ？　やべ、いきなり愛の告白とかされたらどうしよ」

「鏡で自分の顔を見てからぬかせ」
「ったく、ノリの悪いやつ。そんなんじゃ女の子にもてねえぞ」
「こんな場所じゃ、ゾンビ以外の女なんていないだろ。あれは例外みたいだが」

ぶつくさと文句を言う恭司を放っておいて、俺はバスの上の女を見る。彼女は武器らしい武器を一つも持っていなかった。ゾンビどもの手がバスを叩く音にびくびくしている。よくもまあ今日の今日まで生きていたものだ。

俺はため息をつくと、足に力を込めて跳躍した。
女のいるバスまで五十メートル、屋根の上を飛んで移動する俺たちはヒーローみたいに見えるだろうか。

「大丈夫か？」

突然バスの上に降り立った俺たちに、彼女は肩を大きく震わせた。

「人間、なの……？」
「いえーっす。君を助けに来た王子だよ、マーイプリンセス」

恭司がおどけた口調で言う。命がかかってるときにこんなふざけたこと言われたらどん引きする前に咄嗟にぶんなぐってしまいそうなものだが、女は困惑した顔で俺と恭司の顔を見比べているだけだった。
周囲では相変わらずゾンビどもがバスをよじ登ろうと躍起になっていた。そのうちよじ登れる奴が出るかもしれない。

「いきなりだけど、あんたはあれを食ったか？」

単刀直入に尋ねる。女は俺の言ったことが分からないのか、訝しそうな顔をしているばかりだ。
この様子を見ると、あのことは知らないのだろう。
「食ってたらこんなとこで立ち往生してねーだろ、マゾでもない限り、さ。それともウルトラ脱出危機一髪作戦？」

恭司がケラケラと笑った。女はますますおかしな顔になっている。
と、ゾンビの一匹がどこか縁を掴むのに成功でもしたのか、屋根の上に這い上がってきた。気付いた女が悲鳴を上げる。ヒステリックな声は実に耳障りだ。大きな声を出してしまえば新しいゾンビが次から次へと寄ってくるってのに。
俺は恭司と視線を合わせた。恭司がうなずくので俺はゾンビの頭を金属バットで潰した。女が再び悲鳴を上げる。
これぐらいで悲鳴を上げるなんて、この女は本当にどこでどうやって生きていたんだろうか。
暗い感情が胸中に沸いた。
ゾンビどもが人間を食らい始めて一年、ライフラインは全滅している状況では人間がいれる場所など限られているだろうに。ましてゾンビどもに襲われない平和な環境など、どこにあったというのだろう。
ゾンビが動かなくなったのを確認すると、俺は後続のゾンビどもを蹴散らし、死んだゾンビを屋根の上に完全に引き上げた。うまい具合に小太りのゾンビだ。

「恭司、回り見とけよ」
「おうさ」

軽い返答だが、信頼できる相棒だ。心配する必要はない。この一年でそれは嫌というほど分かった。いや、分からざるを得なかった

と言うべきか。
俺はナイフを取り出すと、ゾンビの二の腕に突き立てた。軽くその刃を動かし、一口大の肉を切り取る。黒い血の滴る肉はお世辞にもうまそうには見えない。
しかし俺はそれを目の前の女に差し出して言った。

「食え」

女の反応は顕著だった。
最初はきょとんとした顔で差し出されたものを見ていたが、意味を理解したのかただでさえ顔色の悪かった女の顔からさらに血の気が引いた。体をわなわなと震わせ、鬼でも見たかのような顔で俺を睨みつけてきた。それから助けを求めるように恭司を見た。
しかし恭司が言ったことといえば、

「尻の肉の方が良いんじゃない？」

女は気絶した。

2、帰宅

最初にゾンビの肉を食った奴は頭がイカれていたに違いない。しかしそのイカレポンチの行動は人類の存続の重要なカギとなった。
なにしろ俺が、というか俺たちが今生きているのは、ゾンビの肉を食っているからなのだ。

ゾンビに噛まれた人間はゾンビとなる。これは事実だ。
しかしゾンビを食った人間はゾンビに噛まれてもゾンビにならない。これも事実だ。
伝染病における抗生物質みたいなものなのだろうと俺は推測している。ゾンビどもがゲームのバイオハザードと似たようなものであると考える理由はそこである。科学者の大半が死んでしまっているから真実は分からない。研究するような余裕も施設もないだろうし。もしかしたら映画のごとく地下施設で悪の組織が研究を今なお続けているかもしれないが、政府もなくなって自分の生活でいっぱいいっぱいの一般人にとってはそれほど関係ないことだ。とかくゾンビにならないという事実が分かれば十分なのだ。

「やっぱ俺が運んで帰るしかねーよな、役得役得」

恭司が緩みきった顔で言う。俺は仲間以外の女というのが基本的に信用できないし好きでもないが、もともと女好きの恭司は嬉しいのだろう。恭司は女を腕に抱いて民家の塀の上を危うげなく歩きながら帰路につく。屋根でなく塀の上なのは、さすがに人一人を抱えて移動するのに屋根の上を飛ぶのは危険だからだ。
帰る道すがら、俺はところどころに張り巡らされているワイヤーが切れていないか確認する。
俺たちの住む『家』の周りには道をふさぐようにワイヤーを張り

巡らせているところが何か所もある。バリケードもだ。俺たちはそれを結界と呼んでいる。
ゾンビどもは力は強いが知能は高くない。餌の臭いや音が遠すぎるとそこに餌がいると気付かないし、進むことができないとそこを壁とみなす。設置までの苦労はあったが、結界を十重二十重に――それこそ『家』から数キロ離れたところまで範囲を広げて張っておくことで、ゾンビたちの襲来を防ぐことができるのだ。万が一侵入されたとしても、すぐにそれとわかる。
とはいえ、いくら守りを固くして侵入を防いだところで俺たちはたびたび結界内から外へ出てゾンビを狩らなければならない。ゾンビの肉を食らうために。
それは単に感染防止のためだけではなかった。
ゾンビの肉はそれ以外にも思わぬ副作用をもたらしたのだ。福音と言ってもいい。
身体能力の飛躍的向上である。
聴力や視力の向上もそうだが、筋力や回復力がそれまでとは比較にならないくらい増強した。俺が屋根や塀の上を飛びまわれるのは化け物じみた身体能力のおかげだ。
それ以外にも、体全体を活性化させているのか、治癒力や病気に対する免疫力、それに食物の栄養吸収率の増加にも効果があるようだ。ゾンビの肉を食べる前と後では、劇的な違いが生じる。
厳密に検証したわけではないが、ゾンビ肉は継続的に食べなければ効果が弱まってしまうことが分かっている。よって、生き残るためにも俺たちは定期的にゾンビを狩って食っている。元々食料が少ないのでゾンビ肉を食べる割合が増えているというのもあるが、文明社会が崩壊した現状では生きるためにはゾンビ肉のもたらす効果が必要不可欠なのだ。
「よーしよし、見えるかいお姫様。あれが我が家だぜ」

恭司が気絶した女に話しかけている。当然のことながら返事はない。

俺は数百メートル離れたところにある『家』を見てほっと息をつく。いつもと違う状況というのは割と緊張するものだ。それが人間の、しかもゾンビ肉を食っていない女だというだけで緊張は倍増する。

現在の平和を得るまでに、馬鹿なヒステリー女によってどれほどの災厄に見舞われたことか。思い出すだけで陰鬱な気分になる。特にあの名前も思い出したくない超バカ女、あの女が周りに散々迷惑をかけて暴走した挙句自業自得でゾンビに食われた瞬間、胸をなでおろしたのは俺だけではないはずだ。

生存者がいることは喜ばしい。

しかしそれが人を襲うサイコパスであったり、迷惑をかけることしかしない人間なら論外だ。

今回の女はあの時の女ほど頭の悪い女でなければいいのだが。

女を連れて『家』に入る。入口のボードにかかっている自分たちの名札を『狩り』から『在宅』の方に付け替える。確認してみれば、いつものことだが六十人ほどの仲間の内、留守番の十数人を除いてみんな外出していた。幸いなことに、小百合さんと美由紀が留守番だ。

「ただいまー。生存者発見したよー」

恭司は奥に声をかけながら玄関を上がる。

俺たちの『家』は、元は私立の小さな高校だった。金持ちの家の子が通っていた学校だとかで、内装も学校にしては人気のない廊下を当初は不気味に思ったものだったが、慣れた今となってはなんともない。むしろ落ち着くくらいだ。

保健室のベッドに気絶した女を寝かせる。俺たちの帰宅に気付いた小百合さんと美由紀がやってきた。

「おかえり。生存者？　そんなに遠出してたの？」

美由紀が気絶した女を見てから俺たちに問いかける。

俺は首を横に振った。

「五丁目の先の交差点とこに電柱に突っ込んだバスがあって、その上にいた」

「なんで寝てるの？」

「俺がゾンビ食えって勧めたから」

「軟弱」

美由紀は短く吐き捨てる。

「そーゆー美由紀ちゃんだって、最初はゾンビ肉イヤーって言ってたろ？」

「効果が分からないのに食べるわけないでしょ！」

美由紀は顔を赤くして恭司を睨みつけた。

恭司はひょいと肩をすくめる。

「この人もそういう状態なんでしょ。今までどこにいたか知らないけど」
「ねえ恭司君、その人バスの上にいたって言うけど、詳しく教えてくれないかしら」

小百合さんが尋ねてきた。小百合さんというのは三十代の女性で、実質この『家』での女性陣のまとめ役だ。柔和な雰囲気と冷静沈着な思考回路を持っている頼れる我らがお母さんである。
それはさておき、サバイバル生活で情報の共有は重要だ。俺は小百合さんに包み隠さず話した。といっても、恭司の話と合わせても大した情報量ではなかったが。
追加といえばそう、バスが電柱に突っ込んだ音を恭司が聞いたということくらいだ。どうやら女がバスを運転して、その後動かなくなったので屋根の上に逃げたらしい。なるほど、黒煙が上がっていたのはやはり衝突から間がなかったからか。

「普通の服だったわね」

小百合さんがベッドに寝かされた女の方に視線を向けながら言う。確かに女の服は普通のワンピースだった。
だがそれもおかしい。町には今も多くのゾンビが徘徊している。生活するためには日々サバイバルをしなければならない状況で、ごく普通の女が動きにくいスカートスタイルで動くだろうか。
ベッドの上の女を改めて観察する。
髪はくくっていないセミロング、色艶は悪くない。
色白の顔自体もやつれていないし、汚れていない。汗はかいているようだが、すえた臭いもしない。
見事なまでに清潔な健康体だ。
一年前ならば町を歩けばこんな人間は珍しくなかっただろう。

だが、状況は激変している。ゾンビ肉を食っていない普通の人間だというのに、こんな状態でいるのは紛れもなく異常だ。

「起きたら一度、話を聞く必要がありそうね」

小百合さんが呟く。俺たちも同意した。

3、証言

女が目を覚ますまで、俺と恭司は『家』の畑の手入れをすることにした。

畑は元は学校のグラウンドだったのだが、ホームセンターや園芸店などに何度も足を運んで肥料や土を持ってきて、なんとか植物を育てられるようにしたものだ。『家』で畑が作れるようになったころにはホームセンターなんかに置いてある苗は全滅していたので、種から育てている。俺含めてほとんどの生存者が農業とは縁遠い生活をしていたために、当初はかなりの苦労を強いられた。が、たまたま助けた生存者が本格的な家庭菜園をしていたとかで、本だけでは分からなかったところまで理解することができた。『家』がもう少し田舎なら、少し足を伸ばして農家のビニールハウスを利用できたのにと彼は悔しそうだったが。

「ミミズちゃーん、こんにちはー。毛虫ちゃーん、さよーならー」

恭司がミミズに話しかけつつ毛虫を潰している。一年前は恭司は虫が大の苦手だったはずだが、慣れは偉大だ。

慣れ。もしくは感覚の麻痺、常識の再構築。
それが出来ない人間はみんな死んでいった。
そいつらにとって幸か不幸かは分からないが。

「恭司ー、正也ー、目ぇ覚めたよー」

美由紀の声が聞こえる。俺たちは手入れの道具を片付けると、女がいる元保健室へと向かった。

目を覚ました時に看病していたのが女性二人だったことで、女は先ほどの出来事が白昼夢か何かだと思っていたらしい。俺たちが姿を見せた途端また悲鳴を上げていた。失礼な女だ。それを小百合さんが宥めている。

「あんたたち、この人に何やったの？」

「話した通りさ」

美由紀が冷たい目で俺たちを見るので俺は肩をすくめた。恭司も苦笑している。

「間宮春奈さんよ。ほら、二人とも自己紹介して」

いついかなる時もマイペースを崩さない小百合さんが俺たちに言う。いつもの調子で言われるので、俺もいつものように答えた。

「正也だ」

「恭司だぜー。よろしくぅ！」

ピースサインをする恭司を美由紀がジトリとした目を向ける。ま、いつものことだけどな。

それは別として、間宮という女は分かりやすいくらい俺たちに対して警戒心を抱いていた。眉を寄せて口元をきつく結び、俺たちとは目も合わせない。

「あっれ、もしかして春奈ちゃん俺のこと嫌いになっちゃった感じ

？　俺ショックー」

恭司がへらへらと笑って言うが、間宮の顔はこわばったままである。小百合さんがとりなそうとしても、俺たちの方には目も向けようとしない。

小百合さんがため息をついた。

「しょうがないわねぇ。二人ともちょっと外に行ってて頂戴。私達で話を聞いておくから」

口をつぐまれていてはしょうがない。

俺たちは小百合さんの言葉にしたがって部屋を出ることにした。

といっても、畑仕事に戻るわけではない。

部屋を出て、素早く外に出る。そして外側から回って保健室の窓の下に俺たちは陣取った。

小百合さんの言う外とはここのことだ。俺たちは気配を殺して間宮の話に耳を澄ます。ゾンビ肉を食った俺たちからしてみれば、これくらいの盗み聞きは朝飯前だ。

「それで……間宮さんはどうしてあんなところに？」

俺たちがスタンバイしたのを気取ってか、小百合さんが質問を始めた。

「……今まで山奥のシェルターで暮らしてたんですけど……外はもう安全だって電波放送があって……」

電波放送？　山奥のシェルターに届くような？

俺は眉をひそめた。もしかしたら電波塔だけ外部に出たシェルターだったのかもしれない。

何はともあれ間宮ががそんなシェルターにこもれるような地位にいた人間であるということは確かだ。

「それで、バスで皆と外に出たんですけど……途中でゾンビに襲われて、バラバラに……」

そう言って間宮は黙り込んだ。

気になる点はいくつもある。ありすぎて困るほどだ。

「そう。じゃああなたが最後にいたバスに皆で乗ってきたっていうこと？　……そう。辛いとは思うけど、もう少し質問させてね」

小百合さんの言葉から察するに、間宮はうなずいたのだろう。

「あなたの仲間は何人いたの？」

「……私を入れて、十人でした」

「そのうちで確実に死んだ人は？」

間宮が息を飲んだ気配がした。

「っひどい！　何でそんなことを言うんですか！？」

ヒステリックに間宮が言う。

けれど小百合さんがこの程度でひるむはずもない。

「死んだ人は助ける必要がないでしょう？」

ごもっとも。許されるなら拍手を送りたいくらいだ。

恭司は口に指を当てて口笛を吹く仕草をしていた。音は出してないので非常にバカっぽい。

「生きてたら、助けてくれるんですか？」
間宮が恐る恐るといった調子で言う。きっと小百合さんはにっこり笑っているに違いない。
「ええ、もちろん」
「ちょいちょいうちの人数も減ってるもん。多い方がいいのに」
美由紀がため息をついた。
最近は随分頻度も減ったが、日々の仕事で外に出ていると不測の事態で命を落とす奴が少なくない。文明の利器がほとんど使えない状況では、『家』に帰って来ない人間を探すことも困難だ。それでも一応は探すが、ようやく見つけた時にはゾンビに食い散らかされた死体で発見されることがほとんどだ。ゾンビ肉を食うとゾンビにならないかわり、ゾンビに骨になるまで食われるようになるためだ。
人間が生きる意味なんてどうでもいいが、現実的に考えると若い人間がいた方がいい。俺たちだって生きていたらいつかは歳をとる。その時のためにも新たな世代を生み出したいと思っているのだ。種の保存は生物の本能だしな。
現在『家』で留守番をしているのはほとんどが妊婦だ。臨月から推定三か月目と幅が広い。うちの最年長キヨ婆さんが子供を取り上げたことがあるとかで、彼女が産婆をすることになっている。美由紀や他数名の女性がキヨ婆さんに助産の仕方を教わっている。
俺たち男の名誉のために言っておけば、全員合意の上での妊娠である。
間宮はしばらく黙っていたが、やがて小さく息を吸った。
「分かりました。他の人がいる場所、教えます」
「分かったわ」

小百合さんも真剣な声で返事をした。

「ありがとうございます」

間宮が安心したように言う。

「あ、そうそう。その前に」

ここからでは見えないが、恐らく小百合さんはにっこり笑っているに違いない。人の緊張感をほぐす、柔らかな笑みを。

柔和なその見た目とは裏腹に、小百合さんが猫を何十匹とかぶっているということは初対面の人間には分かるまい。

「あなたたちのいたシェルターは、どんな人が集まっていたのか教えてくれないかしら」

お、割と気になる質問が来た。そっちから攻めるのか？

4、一時解散

間宮は一瞬言葉を詰まらせた。
小百合さんの質問は、別におかしな質問ではないと思うのだが。
「……私が働いていた研究所が放射能を扱う危険なものだったので非常用にシェルターが設置されていました。一年前に、生き残った研究員がシェルターに逃げ込んだんです」
「放射能？」
「はい。万が一事故で放射能漏れが起こった時のためにシェルターがありました。」
「当時で何人くらいかしら」
「シェルターに逃げ込めた人も少なくって。最初でも三十人くらいしかいませんでした」

バスでそこから脱出したのは十人と言ってなかったか？　ということは、一年で人数が三分の一まで減少したということになる。
うちの場合でも当初からするとかなり人数が減ってはいるが、何しろ日々ゾンビの相手をしている。それまで命をかけた戦いなんぞとは無縁の生活をしていた人間がほとんどで、戦い慣れるまでも時間がかかった。そうでなくとも、事故や天災、老朽化した建物の崩落、頭がおかしくなって人間を襲う人間など、死の原因はそこら中にあった。仲間割れして出て言った奴もいたしな。
しかしシェルターの中にいた連中がどうしてそこまで減少したのだろう。考えられるのは餓死と病死、それから精神錯乱からの仲間割れだが、間宮の状態から見て餓死というのはまずあり得ない。伝染病が発生してシェルターから出ざるを得なかったという可能性もあるが……

「ねえ、そこにあんたたち一年もいたの？」
美由紀が藪から棒に口をはさむ。ちょっと待てよ、人間が減った理由ぐらい聞いとけっての。
「え、ええ。備蓄はあったから」
間宮は戸惑ったように言った。年下相手だってのに弱いな、こいつ。
「備蓄って食べ物？　出てくるときにその備蓄は？」
「持ってきてないわ」
「はぁ！？　ばっかじゃないの！？」
美由紀が素っ頓狂な声を上げた。
俺はといえば、隣りの恭司が驚いて声を上げようとするのを必死で止めていた。
「あんたたち、研究者やれるくらいなんだから頭いいでしょ！？電波放送だかラジオ放送だか知らないけど、外に出てくるのに食料もまともに持って来なかったの！？　そんなんだからゾンビどもにやられちゃうんじゃない！」
「美由紀ちゃん」
小百合さんがたしなめるように声をかける。
とはいえ、美由紀の言うことはもっともだ。
俺は間宮の返答を待った。
「そ、それが……放送では、ゾンビは一掃したし、食料もあるからと言われていて……」

間宮は困ったような声で言う。
それが本当ならばずいぶんとおめでたい頭の研究者たちだ。放射能なんて危険物扱う割に危機管理能力ゼロだな。
「誰も疑問に思わなかったのかしら」
小百合さんが優しく問いかける。
しかし間宮は答えなかった。ま、沈黙は肯定だろう。
「すみません、疲れていて。休んでもいいでしょうか」
唐突に間宮が言う。
おいおい、お前の仲間の救出はいいのかよ。仲間とはぐれた場所すらまだ言ってないぞ？
よっぽど突っ込まれたくない話題なのか、それとも作り話なのか。後者の可能性が高いように思える。はぐれた仲間ってのがいないなら、危険を冒して助けに行く必要もないしな。研究員ってのも怪しいもんだ。こんな間抜けでも務まるほど簡単な研究ってなんだよ。
「あら、それもそうね。大変な目にあったんだもの。ちょっとだけ休んでちょうだい、間宮さん。起きたら声をかけてちょうだい。すぐら来るから」
多少美由紀が渋る気配があったが、それからすぐに小百合さんと美由紀は部屋から出て行った。意外なほど一回目の尋問はあっさりだったな。あの小百合さんが間宮の言っていた仲間とやらのことを忘れるとは思わないし、何か意図があって気付かないふりをしているのだろう。
ったく。ゾンビがあちこちうろついてる町じゃ一分一秒の差が生

死を分けるというのに、仲間の救出より自分の休息を優先するか？
万が一本当に仲間がいるとしたら冷血にも程がある。俺としちゃ、もうちょっとぐいぐい締めあげてもいいと思うんだが。

「もう……なんで私がこんな目に……」

間宮が小さくうめくのが聞こえた。ゾンビどもが現れてから、同じようなことを何度考えただろう。
そんなもん、誰もわかるわけがないのに。

と、上の階の窓が開く音がした。見上げて見れば、美由紀がいた。
彼女は恭司を指さすと、小さな声で「見張っていて」と言う。恐らくは小百合さんの指示だろう。囁くような声は一般人には到底聞こえないだろうが、ゾンビの肉を食らっている俺たちには十分可聴域だ。恭司も美由紀に向かってＯＫサインを出している。

どうやら俺は呼ばれているようなので、恭司を残してその場を離れた。

俺がヒステリックな女にいい感情を持ってないということを別にしても、間宮はどうにも胡散臭い。隠し事の数が一つや二つでは済まないに違いない。やはりあの時見捨てておくべきだったかという考えが頭の中をよぎる。
俺はただ、毎日を平和に暮らしたいだけだ。ミステリーもサスペンスも必要ない。クレイジーで穏やかな日常が喜びだっていうのに。
トラブルの予感に頭が痛くなりそうだった。

5、小会議

少しばかり離れた部屋で、美由紀と小百合さんに俺、そして外回りの仕事から帰って来た彰弘さんが集まっていた。その他の妊婦の留守番組に新たな生存者のことは報告してあるが、この話し合いについては彼女たちは不参加だ。

「そう。それはまた面白い人を連れてきたね」

彰弘さんは三十代の紳士然とした人である。ポロシャツにジーンズ、手入れされた髭を生やした彰弘さんは一見優男に見えるが、その実力は折り紙つき。『家』で単独行動を取れる数少ないメンバーだ。

言葉面だけみたら面白がっているようだが、彰弘さんは美由紀からイギリス紳士と呼ばれる非常に皮肉っぽい性格の人なので、さっきの台詞も当然皮肉である。

「でも本当に面白いことになるかもよ。あの人からシェルターの場所聞きだしたら備蓄品が持って来れるかも」

美由紀はウキウキとした調子で言う。単純な奴だな。

「そうねえ。一年も籠城ができたんだもの。結構いいものがあるかもしれないわね。間宮さんの言うことが本当なら」

「本当なら、ね」

小百合さんと彰弘さんが意味深な視線を交わし合う。

その意味を察しないほど、俺も美由紀も純真な性格をしてはいない。

やはり二人も間宮のことを疑っているのだ。
間宮の現れた状況、格好、そして言動。そのどれもが怪しい。というか、おかしい。たとえば間宮の格好やゾンビに対する反応を見てみれば、まるでゾンビどもが増えだした一年前の人間のようだ。ごくごく普通の文明的で平和な日常を送ることは一年前から不可能となっている。だというのに未だにそれを続けられていたということはどういうことか。よしんば本当にシェルターに閉じこもっていたとしても、一年もあんな健康体を保てるシェルターとは一体どんなところなのか。
間宮自身はバスの上で立ち往生するような間抜けではあるが、その背後にあるものを考えると迂闊に信用は出来ないだろう。

「今日の外回り組が帰ってきたら何か分かるかもね」

美由紀が言う。
外回り組というのは、食料を狩りに行ったり、無人の店や家屋に行って物資を探してくるメンバーのことだ。生存者がいれば連れてくるし、何か異変があったら報告が上がる。

「でも間宮ってバス運転して来たんだし、意外と距離が開いてる可能性あるかも」
「でも五丁目の先の交差点でしょう？　半分パニック状態の女性が大型車をそう長い距離走らせるなんてできるのかしら？」

小百合さんの指摘に俺は唸った。
件の交差点につながってる道ってのはそれほどの大通りではない。割と広めには作ってあるがせいぜい二車線、ほとんどが一車線だ。打ち捨てられた自動車も道路上にある状態で、事故を起こさずに長距離走るってのは至難の業だ。アスファルトもだいぶん痛んでるしな。

もし間宮が元バスの運転手だったってんならまだ納得はいく。軍隊上がりの肝の据わったおっさんとかな。でも女、しかもゾンビどもに震えあがってヒステリー起こすような女だ。偏見かもしれないが、あの女がバスを一人で運転するハメに陥ったのは、意外と近場なんじゃないだろうか。となると、あの事故現場付近にはこぎれいな格好をした真新しいゾンビがいるかもしれない。それとも、ゾンビどもが群がっている中心部に平和ボケした頭の科学者様がいらっしゃるか。

「あの人自分で山奥のシェルターって言ってたじゃない。なら少なくとも事故を起こした場所から十キロ以上は離れた場所から来たことにならない？」

美由紀が首をひねる。

確かに間宮はシェルターの場所を山奥と言った。

近場に山がないというわけではないが、山奥と言えるほどの場所となると美由紀の言うとおり、十キロ以上は離れた場所になる。俺たちの家は山から離れた場所にあるのだ。

何しろ山は『危険』だから。

「ま、山奥から町に出ようとすりゃ、ひとたまりもねえよな」

「そうねえ。そもそも山奥からバスで町まで無事に来れたってことが奇跡よね」

小百合さんがうなずく。

山には人型のゾンビよりも危険なものがいる。それがなんなのかは分からない。異形のそれは、山からは出てこないが近づけば命を落とすと言われている。命からがら逃げてきた奴の証言だ。

「研究者の中にはカーチェイスの名手がいたってことかな」

彰弘さんがくっと眉をあげた。
いずれにせよ、推論ばかりではらちが明かない。
「あの人、自分に都合悪いこと隠してそうでなんか嫌なのよね」
美由紀はそう言って口をとがらせた。
「俺も同意見だな。徹底的に締め上げて吐かすべきだと思うけどね」
「仲間になるかも知れないんだから、まだあまり厳しくしちゃ駄目よ」
俺の言葉に小百合さんがチェックを入れる。
まだ、ね。でもあの女、トラブルの種になりそうなんだけどなあ。でも万が一言ってたことが本当って可能性もあるし、取れるものは取ってからの方がいいか。それまでは味方のふりをして信頼を勝ち取っておいた方がいいだろう。勿論、寝首をかかれないように警戒しておくが。
「とりあえず、肉を食べさせるのはちょっと待った方がいいわね。下手に力を持たれても厄介だし。まずは恭司君の報告と外回りの皆の報告を聞かなきゃね」
小百合さんは悩ましげに言う。
うちで『肉』というと、ゾンビ肉のことを指す。ゾンビ発生から一年もたてば、加工された肉は缶詰以外は全滅だし、加工されてない生きた家畜を捕獲するのも一苦労だ。というか、いるかどうかも怪しい。何故か動物のゾンビを見かけることはないのだが、人間以外の生物、こと哺乳類の姿も確認できないのである。もしかしたら山にいる異形のそれが動物のなれの果てなのかもしれない。とかく

そういった食糧事情の影響で、俺たちが普段食べる肉は必然的にゾンビ肉となるのだ。
当初は感染防止のためにも間宮にはゾンビ肉を食わせたいと思っていたが、下手に力がついて暴れられたらそれこそ厄介だ。その原因がヒステリーであれ裏切りであれ。

「報告を待つのもそうだけど、その前に一度彼女の乗っていたバスを知らべる必要があるんじゃないかな。幸い時間はまだあるし。正也君、バスの場所を覚えているよね」

彰弘さんが俺を見る。俺は頷いて見せた。

「そう。なら話は早い。早速行こうか」
「え、もうですか？」

俺が驚いて言うと、彰弘さんはにこりと上品に笑った。

「次に彼女と話をするまでにある程度の裏付けを取っておいたら、さえずらせるのも簡単だろう？」

さえずらせるって、確か英語で言う自白させるって意味だったような……
彰弘さんに尋問されて、自白しない自信がない。手段を選ばない人だということはよく知っている。こういうとき、つくづくこの人を敵に回さなくてよかったと思うね。

6、謎

外回り組が帰ってくる前にと、俺と彰弘さんは大急ぎで例のバスのところに向かった。幸い、距離にして数キロしか離れていない。急げば日のあるうちに十分情報収集ができるはずだった。

しかし、

「……ない」

俺は呆然と呟いた。

俺はつい先ほど、間宮を最初に見つけた場所に立っていた。眼下には壊れた電柱はあるものの、間宮が乗っていたバスは影も形もなかった。俺が殺したゾンビの死体でさえも残っていない。

「おや、馬鹿には見えないバスなのかな？」

彰弘さんが言う。こんなときにも皮肉を忘れないのはさすがというべきか。

しかし今の俺には軽口を返せるだけの余裕はなかった。

なんでないんだ？　記憶違いのはずはない。この場所自体、もう何度も来た場所だし、ついさっきのことを忘れるほどボケちゃいない。誰かがバスを乗って行ったのか、でもなんで事故ったバスなんか。間宮の仲間が近くにいたのか？

「正也君、記憶違いなんじゃないかな。別の場所だったとか」

反応がない俺に、彰弘さんがフォローするかのように言う。

しかし、断じてそんなことはない。
俺はバスがあった場所に降り立った。彰弘さんも俺に続いて地面に降り立つ。
「確かにここにバスがあったんだ。あっちからこっちに向かって突っ込んで、縁石乗り出して電柱にぶつかってて。ほら、電柱に事故った跡もある！」
異変は凶事の前触れだ。俺は嫌な予感に体を震わせた。
迷信的な意味ではなく、常でないというのは緊急事態の前段階のサインにほかならないからだ。小さなサインを見逃せば、後の大惨事を防ぐことができない。
俺は壊れた電柱を指差した。衝突の衝撃で欠けたせいで、真新しいコンクリートがのぞいている。縁石もわずかにかけているし、うっすらとではあるがタイヤ痕や漏れ出したであろうオイルの跡があった。
彰浩さんは髭をなでながらしげしげと現場を見ていた。
「……ふむ。洩れ出たオイルの跡らしきものもあるね。オイル跡なんて町中にあるけれど」
その言葉に思わずかっとなった。
「俺が嘘ついてるって言うのかよ！」
「そうじゃない」
厳しい眼差しに思わずはっとした。俺は思わず口をつぐむ。
「そうじゃない、正也君。分からないかい？　ここはオイル跡がう

っすら残っているが、オイルの臭いはしない。しかし代わりに、何か化学薬品の臭いがする」

その言葉に俺は目をみはった。

慌てて鼻を利かせてみれば、確かに妙な臭いがした。漂白剤とか消毒液とか、そういった類のものだ。

「もしここにあったバスを君たちが立ち去った後に誰かが乗っていったとしても、衝突の際にガラスの破片なんかが落ちてしまっているはずだ。車の塗料、バンパーの破片なんかもね。しかしこの場には事故の痕跡がこの電信柱しかない。それにこの辺りの地面は――」

言いながら、彰弘さんは近付いてきたゾンビの首をナイフで切り落とした。

「――妙に綺麗だ」

俺は背後にいたゾンビをバットで殴り殺してから地面を検分する。

確かに彰弘さんの言うとおり、地面は石一つ落ちていなかった。変だ。

しょっちゅう道路工事だなんだと整備されていた時でさえ、道路上には小石の一つや二つは必ず転がっていた。まして文明社会が崩壊してから一年も経っているのだ。現在は大抵の道路は石や砂、落ち葉にまみれているし、アスファルトの塗装がはがれてきているところも多い。

それなのに現在、ついさっきバスが事故を起こした現場は小石もガラスもプラスチックも落ちていない。

まるで誰かが念入りに掃除した後のように。

背筋に冷たいものが走った。
こんな荒廃した街で、誰が掃除するってんだ。ピンポイントで、間宮のバスの跡だけを、犯罪者が証拠を隠滅するかのごとく細心の注意を払ってまで！

間宮の顔がよぎる。サバイバルなどしたことがないというような色白い顔や、柔らかそうな手、手入れされた髪、こぎれいな服装という、非常識な女。
そしてその非常識な女が乗ってきたはずのバスは、非常識にも煙のごとく姿を消した。何者かによって人為的に。

――もしかして俺たちは、とんでもない厄介事を背負い込んじまったんじゃねえの？

八つ当たりのように、背後から迫ってきたゾンビをバットで殴り飛ばす。首が千切れ飛んで見事にホームラン。しかし気分は晴れなかった。
派手に音を立ててしまい、遠くにいたゾンビどもがこちらに気付いてしまったようだった。俺たちは屋根の上に退避する。

「本当に……君たちは最高の人を見つけたようだね」

彰弘さんのため息が耳に突き刺さった。

7、飴と鞭

結局、間宮の乗ってきたバスに関する手掛かりはつかめなかった。周囲のゾンビたちも一通り探したが、間宮のような小奇麗な格好をしたゾンビも見受けられなかった。

そして俺と彰弘さんが帰宅したころには、外回りの連中も全員帰ってきていた。

間宮については小百合さんが一通り説明してくれたらしい。

間宮は今の時間までずっと起きなかったそうだ。つまり追加の情報はゼロ。

さらに詳しい情報を集めるのかと思ったが、その辺は小百合さんと彰弘さんが一手に担ってくれることになった。

代わりにというとなんだが、俺と恭司、それから美由紀は間宮の監視係兼世話係になった。年が近い方が警戒心も薄れるだろうということだ。俺たちの方が多分間宮より年下だしな。

ほぼ同年代があと数人いるのだが、あまりそういう仕事には向いていないタイプだし、俺たちのが顔見知りだからという理由で任命されたというわけだ。俺と恭司は嫌われていると思うのだが……まあ一応命の恩人だしなんとかなるか？

ああ、それともう一人。懐柔係として現在八歳の絵里も世話係だ。絵里は小さい割には賢いし、人懐っこいのでこういう役割にはうってつけである。

さて、夕食時がやってきたので未だ寝ている間宮を呼びに行くことにした。恭司は報告会に参加、美由紀は面倒くさがって逃げてし

まったので、俺と絵里だけだが。

「間宮、入るぞ」

ノックをして部屋に入る。間宮は横になっていたが起きてはいたようで、ベッドにいる人影がびくりと震えた。

そうとう警戒されてるな。それとも気が立ってるのか？　見ず知らずの人間に連れてこられたら誰だってそうなるだろうが。

俺が絵里に合図を出すと、絵里はこくりとうなずいて間宮に近付いていく。

「お姉さん、ご飯一緒に食べよ」

子供の声に驚いたのか、間宮が身を起こす。

薄暗い部屋の中でも間宮の顔色が回復しているのが見て取れた。さすがに昼過ぎから夕方まで寝たら回復したようだ。

「あの、あなたは？」

「絵里は絵里って言うの」

絵里は人懐っこい笑みを浮かべて笑う。ゾンビ肉を食べていない間宮に、この薄暗がりでその笑顔が見えたかは謎だが、間宮の表情が少しだけ柔らかくなるのが分かった。さすがは平和ボケの研究者様。子供には警戒心が緩むらしい。効果てきめんだ。

俺は懐中電灯代わりの提灯を持って間宮に近付く。ジーンズに半袖シャツの人間が提灯を持っている光景というのは、初めて見る人間からするとなかなかにシュールだと思うのだが、間宮は俺の顔を認識して警戒しただけだった。ちなみに提灯というのは少しでも雰囲気を和ませようとある外回りの奴が持って来たものだ。意外と趣

があって面白いので俺もたまに使っている。

「飯の時間だ。食うんだったらついて来い」

俺の姿を確認した間宮は不信感をあらわにして睨んできたが、タイミング良く彼女の腹の虫が鳴ってしまったためにその虚勢は見事に崩れた。

「お姉さんもお腹すいたんだね。絵里もお腹すいた。一緒に食べよ！」

絵里が無邪気に手を引けば、間宮は僅かに微笑んだ。女って子供に弱いな。

間宮はもたくさと靴を履いて立ち上がった。

「灯りはいるか？」

俺の質問の意味が分からなかったのだろう、間宮はキョトンとした顔で俺を見た。

「足元を照らす灯りはいるか？」

すでに日が沈んでいるので辺りは薄暗い。外でも暗いというのにここは屋内だ。学校というのはその建物の性質上窓が多く採光にも優れているが、日没後の灯りは用意しなければどうしようもない。まして間宮にとっては初めての建物なのだ。夜目がきくならともかく、見えづらいのであれば明かりが必要だろう。

しかし二度目の問いかけにも間宮は答えなかった。子供でもないだろうに、意地を張ったように視線をそらして俺の方を見ようとも

しない。
俺はやれやれとため息をつくと、提灯の明かりを消した。
辺りがぐっと暗くなる。といっても、俺や絵里には十分見えるのだが。

「な、なんで消すのよ！」

怯えるように間宮が言う。

「いらないようだったからな」

ぶっきらぼうに答えれば、間宮は不満そうな顔をした。恭司であればフェミニスト精神を発揮してもう少し親切にしただろうが、あいにく俺はフェミニストではない。

「大丈夫だよ、お姉さん。絵里が案内してあげるから」

そう言って絵里は間宮の手を握った。先導してやるのだろう。

「ありがとう。絵里ちゃんは親切ね」

間宮は根に持っているのか、『は』という所に異様にアクセントを置いた。本当にガキみたいな女だ。
それにしても、俺と絵里で期せずして飴と鞭の状態になっている。絵里を使えば間宮の懐柔も楽そうだ。

廊下を歩きながら俺はふと疑問に思ったことを尋ねた。

「あんた、歳いくつ？」
「何よ、いきなり」

間宮は刺々しい声で言う。
俺は肩をすくめた。
「イライラして、更年期障害じゃねえの、おばさん」
「私はまだ二十四よ！」
「へえ、童顔なんだな」
「放っといて！」

そう言って間宮は顔をそらした。本当にガキっぽい女だ。美由紀と同年代と言われても納得がいく。
それにしても、間宮は見た目よりは歳を食っているが随分と若い。

間宮は自分を放射能に関係する研究員だと言った。
ってことは、理系で院卒だと思ったのだが、よく考えたら年齢がおかしいのだ。大学を卒業するころには二十二歳。今で二十四なら、シェルターにこもったころには二十三歳だったはずだ。
大学院に行かなかったのだろうか。それとも見かけによらず優秀で、スキップしたとか？

小百合さんたちに報告することが増えたと考えていると、横から視線を感じた。
「そういうあんたは何歳なのよ」
「……十九だけど？」
「はん。私より年下じゃないの」
何の対抗心だよ。
「それが？」

俺が面倒くさそうに（実際面倒くさいのだが）返すと、間宮はむっとした様子でこちらに詰め寄ってきた。

「年下なら年下らしく、目上を敬ったらどうなの！？」

「年上なら年上らしく、分別の付いた落ち着きのある行動ほしいもんだな」

「なんですって！？」

間宮の眉がきりきりと上がる。

「お、お姉ちゃん！　正兄も、喧嘩は駄目だよ！」

間に挟まれた絵里が泣きそうな声で言う。

その声に我に返ったのか、間宮は急にしゃがみこんで、絵里の頭を撫でた。

「ごめんね、恐がらせちゃって」

「もう喧嘩しないでね？」

「うん、うん。しないから泣かないで」

猫なで声で絵里を撫でる間宮を見て、俺は早くもうんざりしていた。

情報を引き出さなきゃいけないのは分かってるが、こんな女とこれからしばらく顔を付き合わせなくちゃならないなんてうんざりする。ゾンビ狩りに出かける方がまだ気楽そうだ。今後はなるべく絵里と恭司に世話係を押し付けたいところだ。美由紀と間宮だと絶対にそりが合わなさそうだしな。いや、でも女って分からないからな。昨日までいがみ合ってたやつが急に仲良くなっているなんてこともあるし。

隣できゃっきゃと楽しそうに絵里と会話している間宮を見て、俺はこっそりため息をついたのだった。

7、飴と鞭（後書き）

間宮

8、食事

食事は基本的に元学食でする。厨房もあるし、百人ほどまでなら余裕で食事ができる広さがあるからだ。私立ゆえかとても金のかかった作りで、椅子やテーブルが洒落ているのは当たり前、壁にはタペストリーがあり天井には白い飾りのついた天窓がある。おかげで太陽が出ている間は明るい場所で食事を出来るというわけだ。俺の通っていた公立高校の薄汚れた狭い学食とは大違いである。

といっても、綺麗だった食堂も今では随分と所帯じみてきている。テーブルの上に調味料が配置されていたり、照明の蝋燭やランプの煤で汚れたりしているからだ。あとは防寒対策のタペストリーなんかも。それから会議用の掲示板なんかも置いてあるし、まあ色々とものが増えた。あちこちに夕食時の灯り用に蝋燭が置いてあるしな。

間宮と絵里と一緒に食堂に入ると、すでに食事を始めていた人間がこちらを見ていた。間宮が体をこわばらせるのが分かった。ま、こんな大勢に見られたら緊張するわな。足音と声で来るのがばれていたんだろう。この女のことはみんな聞いているはずだし。

「あ、春奈っちじゃーん。さっきぶりー」

恭司がへらへら笑って近付いてきた。間宮は一歩下がる。必然的に間宮の前に絵里がいる格好になった。いい年して子供に頼るなよ。

「恭兄、お姉ちゃんが恐がってるよ。めっ」

絵里が恭司を叱るように言う。精一杯恐い顔をしているつもりらしいが、はたから見れば微笑ましいもんだ。

「あ、そっかそっか、ごめーん。でも大丈夫だよ、俺ジェントルマンだし」

恭司を歯を見せて笑う。

「あんたより彰弘さんの方がよっぽどジェントルマンでしょ。何言ってんだか」

と冷たい声で言うのは美由紀だ。彼女の前の席には手つかずの食事が四つ用意してある。俺と間宮と絵里と、あとは誰のだ？

「んっだよ、俺は春奈っちをエスコートするんですー。ジェントルメンなんですー」

「メンだと複数形になってんぞ」

「うぷす、俺は唯一無二のジェントルマンなのに！」

恭司のこのテンションはたまに疲れる。っていうかうざい。

つか、春奈っちってなんだよ。あだ名のセンスないな。

「あー、おほん、ともかく春奈っちとエリリンはこっちね。で、正也はそこの席」

そう言って恭司は俺たちを手つかずの食事が用意されている席へと案内した。ちなみにエリリンとは絵里のあだ名である。

俺の右に美由紀、俺の対面が恭司、その右に絵里と間宮という配置になっていた。一応間宮との間に絵里を配置したあたり、恭司も気を使っているらしい。流石は自称ジェントルマン。

「ごっはん、ごっはん！」

絵里が嬉しそうに席に着く。
間宮も絵里に連れられて座ったのだが、用意されていた食事を見て目を丸くした。

「これが……食事……？」

愕然とした響きを帯びたそれに、俺はほんの少しばかり頬が引きつるのが分かった。

「今日は豪勢だね！」

絵里はニコニコと笑う。

今日のメニューは確かに豪勢だった。
白米、ほうれん草っぽい何かのおひたし、梅干し、ブラックバスのような何かの切り身の塩焼き、麩が浮いた味噌汁、そしてデザートに桃（缶詰）。
恐らくは間宮にゾンビ肉を食わせないためだろうが、それにしたって豪華だ。梅干しも麩も味噌も、すでにあるものを少しずつ使っていっているのだ。それに加えて人数分の魚の切り身など、どうやって用意したのだろう。塩漬けになってるっぽいし、保存食にしてたのか？　桃は缶詰のを開けたんだろうし……

「絵里ちゃん、いつもこのくらいしか食べてない、の？」

恐る恐るといった調子で間宮が尋ねる。
まあ、事情を知らないんならそう思っても不思議じゃないよな。

「今日はいつもより多いんだよ！」

絵里は無邪気に笑う。間宮は絶句していた。
俺たちが会話している間にも、みんなどんどんと食事を終えて出ていく。いつもならば一声かけられるのだが、今日はそれもなしだ。恐らく小百合さんからそういう指示が出ているのだろう。

「ほら、ご飯冷めちゃうし早く食べよーぜ。よく噛んで食べてね、春奈っち」

恭司が明るく言うが、間宮は恭司のことをまるっきり無視していた。感じの悪い女である。美由紀も不愉快そうに眉をひそめた。

「お姉ちゃん！　恭兄のこと無視しちゃだめだよ。恭兄はガラスのハートなんだから」

絵里が間宮に注意した。ガラスのハートというのは普段恭司がよくぬかすたわごとのことだ。
ま、実際うざい言動にまぎれて分かりづらいが恭司は割と繊細な奴だ。間宮に無視されつづけてたら凹みまくるだろう。

「そ、そうなの？」

間宮は困惑したような顔を浮かべる。子供にこう言われてしまえば、露骨に無視することも難しいだろう。

「お姉ちゃん、恭兄にごめんなさいしてね」
「う……ご、ごめんなさい」

絵里に促された間宮はかなり渋々ではあったが、恭司に謝罪した。

「も、全然オッケーだよ春奈っち。俺、春奈っちならなんでも許せちゃう！」

相変わらず調子のいい奴だ。っていうかお前、最初春奈ちゃんって呼んでなかったか？　春奈っちって固定なのか？

馬鹿馬鹿しいやり取りにため息が漏れる。って、これ何回目だっけ？

「とっとと食うぞ」

俺は箸を取った。

さて、恭司がよく噛んで食えと言ったのには一応理由がある。

食事を始めてから五分後、

「ご馳走さま」

間宮が箸を置いた。

別に間宮が食うのが早いというわけでも、気分が悪くて残したというわけでもない。

量が少ないのだ。

食事の際、せめて見た目だけでも楽しくと高価で綺麗な食器を使ってはいるが、その中に盛られているのは微々たるものである。

主食の白米で言えば茶碗の三分の一程度だし、食える野菜ってのは貴重だから収穫期以外は二口分程度、梅干しも一つだけだし魚については刺身レベルのサイズになる。唯一汁ものはたっぷりだが、

具は数えられるぐらいしか浮いていない。今日のデザートである桃も一口サイズだ。
大人どころか子供だって満腹になるかどうか怪しい。
それでもゆっくりかんで食えば、まあなんとか満足した気になるレベルだ。
こんな食生活ばかりを続けていれば栄養失調になりそうなものだが、普段はゾンビ肉が主食としてたくさん食べられるから問題なし。それにゾンビ肉を食う効果として、栄養の吸収効率の上昇というのも含まれている。量が少なくともなんとかなるもんだ。サプリも腐るほどあるしな。

「んだよ、物欲しそうに見てもやんねえぞ」

健康体に見える間宮には足りないらしい。ということは、こいつはこの一年普通の量の食事をしてきたってことか？

「べ、別に物欲しそうに見てなんかいないわよ」

間宮は顔を赤くして否定した。

「お姉ちゃん、絵里のお魚さん食べる？」
「大丈夫よ、絵里ちゃん。お姉ちゃんはお腹いっぱいだから！」

絵里が心配そうに首を傾げて言うので、間宮は慌てて否定した。そのくらいはプライドがあるらしい。

「ま、慣れだな」
「慣れよね」

俺の言葉に美由紀が同意した。

確か女性陣はこの貧しい食卓のことをダイエットなのだと自己暗示をかけて乗りきっているのだと以前に聞いた。男性陣の一部は自分が減量中のボクサーなのだと暗示をかけているそうだ。なんともはや、豊かな食生活が懐かしい。

「あ、食事が終わったら小百合さんが話があるって」

美由紀が思い出したように言った。間宮の表情が僅かに固くなる。

「不安なら、俺がついて行こうかレディ」
「ううん、いらない」
「オーマイガッ」
「恭司うざい」

俺は一言で切り捨てて最後の桃を口の中に放り込んだ。

そういえば、間宮が目を覚ましたら尋問するっぽいこと言ってて結局してなかったな。
腹が減ってたら気が立って上手くいかないかもしれないし、そんなもんなんだろう。

今日の世話役はこれで終了か。ったく、疲れた。

9、過去

幼馴染であるあいつとの友情を疑ったことなどなかった。

『まずい、数が多すぎる！』

隠れ家のバリケードをゾンビどもに壊されて、移動を余儀なくされた。少ない食料を持って、必死に親友と逃げた。道の選択を間違えて、背後には十体近いゾンビが迫ってきていた。

ゾンビ肉を食った後なら何とか出来る数だ。逃げるなんて楽勝だろう。しかし当時の俺は、何の変哲もない高校生だった。

ゾンビから逃げる生活で精神的にも体力的にも限界が来ていた。

鈍い動きのゾンビたちに対抗することすらできないほどに。

ゾンビたちの気配が背後に迫っていた。何かが髪の毛をかする感触がして、鳥肌が立った。

『嫌だ、こんなところで死にたくない！』

そのセリフを口にしたのは俺じゃなかった。

唐突に、予想外な方向から突き飛ばされた。ゾンビたちのいる方向に。俺は思い切りゾンビにぶつかり、転んだ。

俺を突き飛ばしたのは、親友だと思っていたあいつだった。

『正也、俺の代わりに死んでくれ！』

そう言ったあいつの顔を、俺は思い出すことができない。あいつの名前も。

親友を囮にして――いや、違う。親友を生贄にしてあいつは助か

ろうとしたのだ。

逃げるあいつの背中を見て、俺は茫然とすることしかできなかった。

小学校以来の親友で、ゾンビどもが俺たちの町に現れて一週間、一緒に逃げていたのに。

背後に迫る死の恐怖よりも、裏切られたショックの方が大きかった。

今思えば、とんだ甘ちゃんだ。

しかし俺はラッキーだった。

爆発するような音とともに、俺の首筋に歯を立てようとしていたゾンビが吹っ飛んだ。

『間一髪だな』

男の声がした。

俺の目の前でゾンビの頭がぐしゃりとつぶれた。脳みそが飛び散る。

事態を理解する前に、男は俺を抱えて跳んだ。そして人間とは思えない跳躍力で、足場を使っては大きな時計台の上へと俺を運んだのだった。

『ああ、あっちは間に合わなかったな』

淡々とした声音で男が言う。

彼の視線の先には、俺を生贄にしようとしたあいつがいた。

ゾンビに囲まれたあいつは、生きながらにして食われていた。断

末魔が上がる。

『ざまあみろ』

思わず呟いた俺に、男は笑った。

『友達じゃなかったのか？』

『さっき、友達じゃなくなった』

その言葉に男はますますおかしそうに笑った。

『生きたいのならそれを食え』

俺にナイフを手渡した男は、頭のつぶれたゾンビを指差して言う。

男に命じられて俺が殺したゾンビだった。

『あんた、頭がおかしいのか？』

『普通の人間じゃないことは確かだな』

男はにやりと笑う。

『普通の人間がこの世界で生き伸びることは不可能だ。だから、お前は人間から化け物に進化する必要がある。俺みたいにな』

どす黒い血の滴る腐肉は、お世辞にもおいしそうには見えなかった。そもそもゾンビだって元は人間だ。カニバリズムなんて今までの俺なら到底受け入れられるものじゃなかった。

だが、俺は男の超人的な身体能力を知っていた。だから食った。
もし男が俺をだましていて、ゾンビ肉を食ったらそのままゾンビになったとしても、俺は怒りはしなかっただろう。せいぜい、なぜあの男自身の手で殺してくれなかったのかと不満に思うくらいだった。
そして俺はゾンビを食らい、人間でなくなった。その選択に後悔はない。

『なあ、正也。一緒に家を作らねえか。みんなが安心して暮らせる、家族が暮らす家ってやつをさ』

鉄塔の上で子供のゾンビを食いながら男は言った。

『ゾンビにおびえて逃げるわけでなく、自分ひとりのためだけに生きるためじゃなく、家族のために生きるってのを、もう一度やってみたいんだよ』

それに協力しようと思ったのは、単に俺がその男を好きだったからだ。敬愛していた。
俺の命は彼に助けられた。だから、それを使うのには何の抵抗もなかった。

生き残っている『まとも』な人間を探した。
並行して『家』をどの建物にするかも話し合った。
一から建てるなんてどだい無茶な話だし、何らかの既存の建物を利用するしかない。
都合が好さそうなのはショッピングモールや駅ビル、百貨店などの商業施設か、ホテルや民宿のような宿泊施設。道具や資材が豊富という点では病院やホームセンターも候補に挙がっていた。
下調べと生存者の探索を兼ねてあちこち回ったが、ショッピング

モールは悲惨だった。ゾンビ発生から一カ月と経過していないというのに、サイコパスの巣窟となっていた。
拉致してきた女を犯す糞野郎、無抵抗な子供をいたぶるヒステリーババア、そしてそれに追従して自分の安全を確保する屑。
そいつらを再起不能にしてから正気を保っていた人間を探したが、サイコパスどもの被害者はほとんどが正気を失っていた。
それでもかろうじて会話が可能な奴から情報を聞き出したが、どうやら人非人どもも元はショッピングモールに逃げ込んできた連中らしい。当初は大人しく救援を待っていたが、状況が絶望的と悟るや否や本性を現し、暴挙に走りだしたのだそうだ。

生き残った奴を保護して、ゾンビ肉を食う奴は食った。

結局そんな感じに仲間を増やして話し合い、『家』を決めた。

ショッピングセンターは中が広い割に、居住できるスペースが限られている。物資は豊かだが、多数の人間が住むには適していない。それに日中も窓が少ないために暗い。駅ビルに至っては電気がつかなければ真っ暗だ。
ホテルなどの宿泊施設にするか、となっていたとき、ある少女が言ったのだ。うちの高校ならいいかも、と。

私立の寮制の学校で、敷地内に百名が住める寮があるので住居については安心できる。食堂も寮と学食双方に付いているので困ることはない。また、校庭には果樹や園芸部の菜園があり、古いが未だ使える井戸が存在する。
さらに立地的に見ても町の中心部からはそれほど離れておらず、都合がよい。学校自体が高い塀で囲まれていて、門は三か所。どれも丈夫な鍵と鉄格子つきだ。まさに俺たちの『家』としてはおあつらえ向きだった。

結局、もろもろの条件を合わせた上で『家』はその学校に決まった。

といっても素人の寄せ集めだ。『家』を家らしくするまでに苦労はあったが、仲間は順調に増えていたし環境も整いつつあった。身体能力が向上して戦闘スキルも徐々に身につけていって、ゾンビどもにやられることもなくなりつつあった。

何もかもが上手くいっているように思えた。――あのときは。

10、来客

――嫌な夢を見たもんだ。

俺は体を起すと、頭を振った。

もはや過去の出来事だというのに、いつまでもあの惨事が俺の記憶に残り続ける。

惨事は風化させてはならないとは言うが、辛い記憶ならば教訓だけ残して忘れ去りたいものだ。

夢の中で見た彼の凄惨な最期を思い出す。

きっと間宮のせいだ。

間宮があの女と似ているせいだ。だから、こんな夢を久しぶりに見たんだろう。

俺がため息をついていると、外で合図の笛が鳴っているのが聞こえた。

どうやら久しぶりのお客さんらしい。

俺は部屋を飛び出した。

向かった先、会議室にはすでに十名の防衛メンバーが集まっていた。

「正也、遅い」

「すみません」

しかめっ面の吉行さんに俺は頭を下げる。

吉行さんは今年で二十五になる元ジャーナリストだ。海外の戦場なんかにもよく取材に行っていたそうで、土壇場での肝の据わり具合がすごい。数々の護身術も習得していて、俺たちが今使っている護身術の半分はこの人にレクチャーされたものだ。

何匹のゾンビを相手にしてもピンピンしている行動力溢れる不死身人間だが、本人いわく隠密行動が向いているそうだ。親父さんが神出鬼没な狼人間だったからと嘯いているが、十中八九嘘だろう。

「とにかく、始めるぞ」

あっさりしているのは吉行さんの美点だ。これが彰弘さんなら間違いなくあと三十秒は嫌味を食らう。

「さっき桜ケ丘の方でサイコパスと遭遇した。あっちの別荘を占拠されたみたいだから、今日中に駆除するぞ」

「何人いる？」

一人が言う。

「とりあえず三人だ。拳銃も持っている。最初に接触した鉄平が三発撃たれた。重傷じゃないが今は治療中だ。翔太たちが偵察に行ってる」

サイコパスというのは俺たちの中でのそういった連中の呼び名だ。本来の精神病の意味ではない。

ゾンビが出てきて文明社会が壊れて、人間も壊れた。

その中でも心の内に飼っていた猛獣を解き放った人間は少なくな

く、他者を襲い、奪い、殺す人間もいた。倫理観も良心もすっかりなくし、ただ自己の衝動に忠実に生きる狂った人間たち。衝動にしたがうのは獣だが、厄介なことに奴らには獣にない悪知恵というものがあった。

そういった連中を俺は――俺達はサイコパスと呼んだ。

平和な文明社会を築こうとする俺たちとは絶対に相容れない存在だ。というか、放っておいても害にしかならない。だから俺たちは積極的にそいつらを駆除することにした。幸いにして、大抵の場合は奴らより俺たちの方が実力が上だった。

サイコパスには自分が劣勢に立つと態度を翻す奴もいたが、それに絆されて許してし後で痛い目に遭う。奴らがいくら殊勝な態度を取ろうも、それはあくまで自分が有利になるために一時的に演技しているに過ぎない。サイコパスになる連中はそういう連中だ。

一時的な錯乱ではなく、単なる本性の発露。

だから、俺たちはサイコパスを人間とはみなさない。あれは人間の皮をかぶった狡猾な獣だ。

「肉は食ってるのか？」

俺が尋ねると、吉行さんは横に振った。

「俺たちの動きを見て驚いていた。銃を持っていたのに追いかけてこなかったし、奴らが食っていたのは携帯食糧だった。恐らく食べていないと思うが……」

微妙なところだ。ゾンビ肉は継続的に食べれば効果が維持できるが、別に毎食食べなければいけないというわけではない。三人しかいないのならば食料の確保も簡単だろうし、ゾンビ肉を食わないようにしているとも考えられる。

そもそもゾンビ肉を食えばゾンビにならないという事実を何人の

人間が知っているのか、俺たちにはさっぱり見当がついていないのだ。

「どうしてその場で始末してこなかったの？」

泉さんが首を傾げた。彼女は防衛メンバーの数少ない女性だ。

吉行さんはにやりと笑った。

「一人殺したんだがな、連中が『救援を呼ぶ』と言っていた」

「どのくらい前？」

「十五分だ。別荘はここから全力で走れば五分ちょっとで着く」

「銃器はどんなんだ？」

「拳銃。多分、警官から奪った奴」

「射撃の腕前は？」

「下手くそ。装填も遅いがトリガーハッピーだ。馬鹿みたいに打ちやがる」

矢継ぎ早に質問が飛ぶ。吉行さんはそれにさくさくと答えていった。

そこへ新しく報告が入った。

「連中は現在『別荘』に籠城しているそうだ。数は七人。全員拳銃を所持。ライフルもあるみたいだな。先日お仲間の一人がゾンビにやられたって話だから、普通の人間。今なら動く車と食料付きだ」

メンバーから歓声が上がる。貴重な物資だ。

防衛メンバーとは言っても、実際に『家』まで攻めてくるようなゾンビもサイコパスも滅多にいない。ほとんどが『家』から離れた

場所にある『別荘』、つまりは外にある活動拠点に侵入して来た連中の駆除になる。

相手は銃を持っている。ってことは、こちらも遠距離に適した武器を持っていくべきだろう。

俺たちは手早く作戦を立てると、防衛メンバー用に用意された革袋を二つずつ持って『家』を出た。

攻撃は最大の防御。サイコパス駆除の始まりだ。

11、駆除

さて、『別荘』というのは基本的に三階建てぐらいの建物を選ぶ。階段を破壊するなり閉鎖するなりして、ゾンビは上がれないようにしておくためだ。一階が駐車場になっているところなんか理想的である。といっても、あまり入口が高すぎるのでは物資を持って上るのに苦労するため、適度に上りやすい場所に入口がある必要がある。ゾンビたちが手を伸ばしても届かない、人一人ぐらいを踏み台にしてもぎりぎり登れなさそうな高さというのが理想だ。

そういう建物ばかりだからゾンビの肉を食った奴にはうってつけの施設だが、基本的に常人は使いづらい。逆にいえば、常人にとっても一度占領してしまえば砦としては上々ということだ。あくまでも、対常人及び対ゾンビとしては。

「……どうだ？」

「余裕」

『別荘』から二百メートルほど離れた地点で偵察部隊と合流して話を聞く。

どうやら敵は『別荘』で籠城してはいるが、周囲への警戒はザルらしい。それもそうだ。生き残りなんてそうそういないだろうし、あそこはゾンビが上がってこない。

奴らは明かりも常備されていたランプを惜しげもなく使っているらしいし、ガヤガヤと俺たちのところまで聞こえるほどの話声を出している。ゾンビが入って来ないから油断しきっているのだろう。あそこに備蓄した食料や道具類は、俺たちが苦労して集めたものだ。サイコパス風情が使ってんじゃねえっつの。

「さっさとゾンビの餌にしちゃう？」

泉さんが退屈そうに言う。この人は技術比べの荒事が好きだから、連中が弱すぎることが面白くないのだろう。

「いや、一応銃の入手ルートを吐かせておかないとな」
「ならリーダー格だけでいいだろ？」
「一応予備に二人くらいは欲しいな」
「まずは銃の無効化からだな。撃たれたら困る。下手な鉄砲数うちゃ当たるって言うし」
「弾丸を使われるのも迷惑だ」
「別荘に被害があるのが一番悪い」
「一人一人潰していくか」
「見せしめ用の人員も確保したいな」

サイコパス駆除は初めてではないので、テンポよく段取りを決めていく。大体いつもやることは一緒だ。
そうして五分としないうちに手筈は整い、俺たちは動き出した。

サイコパスどもが占領しているのは元は公民館だった『別荘』で、木造三階建の推定築五年の南向きで日当たり良好の建物だ。大きい建物のために、建物の前を後ろを道路で挟まれている。一階部分が完全に駐車場になっていて、二階に上がるには正面の階段か裏手のらせん階段を上る必要があった。公民館の癖に地域のお年寄りが使いづらそうな構造だ。建物の東は公園、西は幼稚園。『別荘』に改造するにあたって正面の鉄の階段を取り外し、裏手の木製らせん階段を焼き払って二階に上がれないようにしたのだ。正面から見れば、階段がないせいで両開きのガラス戸と二畳ほどの足場がぽつんと二階部分にあるように見えるだろう。ちょっとした現代アートのようである。
二階にも三階にも東西南北それぞれに窓がある。特に東西のベラ

ンダに続く窓が大きいので、基本的にそこから出入りをしている。武骨なデザインの鉄格子はちょっと前に錆びてしまったので完全に撤去してしまっていることもあって、俺たちぐらいならば足場がなくとも楽々上がれる高さだ。サイコパスどもは梯子を使って上ったらしい。一体どうやってこの『別荘』に目をつけたのやら。

ま、全ては吐かせればいいことだ。

俺は東にある公園の木の影に身を潜ませ革袋の中から武器を取り出すと、いつでも攻撃できる構えをとった。ベランダから距離は十メートルもない。

正面玄関の方から爆竹がはぜる音がした。駆除の始まりだ。

「誰だっ！」

野太い男の声がする。転がるように二人の男がに銃を構えてこちら側のベランダに出てきた。泡を食って上下左右を見回している。あちらの姿が丸見えだ。あまり頭はよろしくないらしい。

俺はそいつらに向かって革袋から取り出した武器を発射すると、素早く木の陰に身を潜ませた。

「ぐっ」
「がぁっ」

男達は短くうめいてしゃがみこむ。
一人は気絶、一人悶絶といったところか。いや、悶絶している一人は腹から血を流している。力加減をミスったようだ。腹から血を流した男は大勢を崩すと、そのまま固い地面へと墜落した。頭から

落ちたのか、ぐしゃりと嫌な音がする。

「敵か！？　どこに居やがる！」

「サイレンサーか！？」

奥から怒声が響く。向こうは随分混乱しているらしい。めくらめっぽうに銃を乱射している。『別荘』正面の家のガラスが割れる音がした。幼稚園あたりも被害に遭っていそうだ。見当はずれも甚だしい方向だ。弾丸が勿体ない。

さらに奥から銃を乱射しながら男が出てきた。無防備に体をさらけ出している男に、俺は鉛玉をぶち込んだ。

鉛玉、といっても銃弾ではない。派手な火花も散らなければでかい音も出ない。俺たちが使っているのは文字通り鉛の玉、つまりはパチンコ玉だ。メダルを使ってる人もいる。

指弾というのを知っているだろうか。小石などを指ではじき、相手にぶつけるという業である。それを小石の代わりにパチンコ玉を使った指弾の撃ち方を吉行さんが皆に教えてくれた。

本来は強く足を踏み込み体全体の力を使って撃つものらしいが、ゾンビ肉を食って身体能力が上がったせいか、それほど強く踏み込まなくとも十メートルぐらいならば十分な殺傷能力を持つようになった。闇夜ならばそれで十分だ。

回収の難しい消耗品ではあるが、鉛玉やメダルなんていうのはパチンコ屋に行けば腐るほどあったので武器として使うにはうってつけだったのだ。いざとなれば小石や小銭で代用できるので、銃弾と違って弾切れを心配する必要もない。

そういえば吉行さんが皆に指弾の撃ち方を教えているとき、彰弘さんが「さすが狼男だね」と言っていたが、何か元ネタがあるのだ

ろうか？

などと下らないことを考えているうちに、制圧は終わったらしい。中で吉行さんたちが呼んでいる。

屋内で銃撃戦にならなかったのが幸いして、『別荘』の中は綺麗だった。潜入は泉さんと吉行さんだったはずだ。相変わらずいい仕事をしてくれる。

まず俺が気になったのは備蓄だ。俺は元給湯室へと足を運ぶ。

中の食料は汚く食い荒らされていた。缶詰にレトルト食品に保存の利く食料。食べかすが床に散らばっている。貴重な食料をなんだと思ってるんだ、こいつらは。

といっても、大した量は置いてないから被害としてはそれほどでもない。掃除が面倒くさそうだが。

建物の中は生臭い臭いがした。どこからか聞こえてくる甲高い笑い声に眉をしかめた。ヒステリックな女の声だ。嬌声というよりは狂声か。

元公民館のだだっ広い畳の上に、五人の男が後ろ手に縛られて転がっている。後の二人は事故で死んだようだ。一人は俺の目の前で墜死した男だ。

五人のうち、三人は完全に気絶しているようだ。一人はうめいているだけで、唯一元気な奴がうるさく喚いていた。

「離せ、化け物どもが！」

威勢よく怒鳴る男の顔はすでにかなりはれ上がっている。あれだ

け殴られても威勢がいいとは大したもんだ。
とはいえ、ぎょろりとした目玉が爛爛と輝いている様子は気色悪いことこの上なく、生理的な嫌悪感を覚えた。その上格好も最悪だ。やくざのような派手なアロハシャツ、首からは金で出来たチェーン、先ほどちらりと見たときには手にも大粒の宝石がついた指輪をいくつもしていた。こんな状況で成金趣味な格好をする必要があるのか？

「うるさい、黙れ」

吉行さんが一番うるさい男を蹴り飛ばした。
ロープで後ろ手に縛られた男は、床を転がった。畳の上に男の嵌めていた指輪の跡が残る。
俺はそれを無感動に見ていたが、ふと泉さんがいないことに気がついた。

「泉さんは？」
「保護してる」
「何人？」
「二人。間に合うかは微妙だな」

誰のこととは吉行さんは言わなかった。
言わずとも分かる。先ほどから聞こえてくるキチガイじみた女の笑い声を聞けば。サイコパス連中と関わっていく上ではよくあることだ。

生存者は様々な危機に襲われる。
まずはゾンビ。次いで飢餓、天災、病気、そして人災。女性は力も弱いし、色々な意味で危険だ。
サイコパス連中に拉致されて連れまわされている女性は少なくないが、壊れていない女性は少ない。残念ながら。

こんな状況下では腕のいい精神科医など望むべくもない。俺たちはわざわざ時間をかけてまでいつ爆発するかも知れない爆弾を抱え込みたくはないのだ。無理なようならとっととおさらばした方がいい。

「お前らどこで銃を手に入れた？」

「俺にこんなことをしてただで済むと思ってるのか！？」

「質問に答えろ」

吉行さんは淡々と言い、男の足を踏みつぶした。ぼきりと音がして、男は苦悶に顔をゆがませて絶叫する。

腹から響くその声に、気絶していた男が一人目を覚ました。尋常ではない様子に気付き、体を震わせている。

「答えろ。銃はどこで手に入れた？　今までどうやって生きてきた？」

「誰がてめえらなんかに……！」

言下に男の顔に吉行さんの靴のかかとがめり込んだ。血と共に折れた前歯が散る。

男は血の混じった泡を吹いて畳に倒れこんだ。

「吉行さん、せめてビニールひいてやってよ。畳が汚れちゃうじゃん」

「日焼けしているしどうせ替え時だろ」

「畳運ぶのって大変なんだけど」

「ひ、ひぃ……！」

俺たちの会話に、目を覚ましたばかりの男が顔を引きつらせた。

と、事後処理を終えた他の防衛メンバーがやってきて、気絶した

男たちを違う部屋へと運んで行く。それぞればらして尋問するのだろう。

「正也、お前も尋問してみるか？　こっちは俺がやっとくから」

吉行さんは歯がガタガタになった男の襟首をつかみながら言う。

「んじゃやってみます」

俺は軽く答えて、顔面蒼白の男に近づいた。

今まで吉行さんや他のメンバーの尋問のやり方は見てきたので、見よう見まねだがなんとかなるだろう。

脅し用のナイフを取り出すと、男は喉の奥で悲鳴を上げた。

12、決着

他人に痛みを与える奴ほど、自分の痛みには弱いらしい。
肌を粟立たせ、滝のように汗を流して震えている目の前のサイコパスに俺は嗤った。

成金男ほどではないが、こちらの男も趣味が悪い。
脱色した髪の毛、両の耳には合わせて八つのピアス、首からはじゃらじゃらとアクセサリー。ブランド物らしいシャツはぼろくはないが清潔ではない。ジーンズもブランド物のダメージジーンズというやつだ。カチコチ音がしているので不審に思って確認すれば、後ろ手に回されている左の手首にロレックスがはまっていた。
年齢はおそらく二十代だろうとは思うが、不健康な生活を続けているためか肌の色からして不健康そうに老けている。吹き出物が目立つ顔面は醜男と形容して差し支えないだろう。その上雰囲気が貧乏くさいせいで、高価な装飾品とアンバランスな印象を受けた。
金が何も意味をなさない現状じゃ、成金趣味とかブランド趣味なんていうのはまったくもって糞の役にも立たないと思うのだが、こういう奴らには重要なのだろう。というか、そういう連中が集まったからこその暴走なんだろうか。
どれだけ格好を取り繕ったって、中身はクズのサイコパスなのに。

俺は男の目の前にしゃがみこむと、血の散った畳にナイフを突き立てた。掃除も面倒だし、今度ホームセンターか畳屋いかないとな。

「さて、足の指と手の指、どっちからがいい？」

無表情に尋ねれば、男は豚のような悲鳴を上げた。
必要ない明かりを消しているため部屋の中は薄暗い。そんな中で

ナイフが煌めけばさぞや恐ろしいだろう。しかし俺の知ったことじゃない。
耳障りな悲鳴に眉をひそめた。俺はサディストでもないので、悲鳴を聞いたところで少しも嬉しくない。

「た、た、頼む！　なんでも喋る、なんでも喋るから！」

男が口の端から泡を吹きながら言う。

「喋ったらただじゃおかねえぞ、カケル！」

吉行さんが確保している成金男が不明瞭な声で叫んだ。
カケルと呼ばれた男は途端に体を硬直させた。力関係ではあちらのサイコパスの方が上なのだろう。恐怖で支配するのはよくあることだ。

俺は嘆息してあぐらをかいた。

「じゃあまず、お前らはどこで銃を手に入れた？」

男は答えない。びくついた様子であちらの男と俺を見比べている。
俺はナイフを引き抜くと、男の右目につきつけた。少しでも頭を動かせば、鋭い刃が男の眼球をえぐるだろう。

「そういや、ミッチーが人体解剖したいって言ってたな。外科手術の練習台がほしいって言ってたし、どうせならあんたやってみるか？　眼球摘出手術のぶっつけ本番で。腹をかっさばくのもいいかもな」

「美千代はまだ家だろ？」

吉行さんからツッコミが入った。どこか笑っているように思える。
「怪我してすぐに治療してもらえるわけじゃないし、ちょうどいいじゃないんすか？　どうせ素人なんだから最初は失敗するし」
俺がひょいと肩をすくめると、男は震えあがった。その拍子にナイフの切っ先が男の目の上を切る。短い悲鳴が上がった。
「自衛隊だ！　自衛隊の奴が生き残って武器を持ってた！　女を当てがって油断して寝てる時に全員で襲ったんだ！」
「その自衛隊の奴は？」
「正義漢ぶって目ざわりだったから殺した、ひっ、止めてくれ！」
男は身をのけぞらした。無意識にナイフを握る手に力が入っていたらしい。
今まで同じようなことは何度もあったというのに、感情のセーブが出来ない俺はやっぱり子供なのだろう。尋問には向いていない。
妙に静かなことに気付いて吉行さんの方に視線を向けると、確保されていた男は床に突っ伏していた。吉行さんによって気絶させられたらしい。死んでるのかもしれないが。
何故か明後日の方向を見ている吉行さんに首を傾げたが、耳を澄ませてその理由に気付いた。
別室の人たちが大体吐かせ終わったらしい。集合がかかっていた。
「後学のために最後までやっとくか？」
俺にだけ聞こえる声量で吉行さんが言った。
ちらりと眼前の男に目を向けて、俺は首を振った。面倒だ。

俺はサイコパスどもを甚振って喜ぶ趣味などない。

「終わりにしときます」

俺は立ちあがると、男の腹につま先をめり込ませた。男はつぶれたカエルのような声を出して倒れた。

「美千代の練習台ってのはいいかもな。一人ぐらいは手術できるやつがいないと」

「吉行さんもできますよね」

「あんなもん、応急処置だ」

明かりを消し、短い会話を交わしながら俺たちは別室へと歩いて行った。

「資源は有効活用しないとな」

吉行さんが感慨もなく言う。

ふと、ごみも分ければ資源です、という懐かしいスローガンを思い出した。

俺もミッチーの外科手術練習に付き合おうかな。麻酔係とか手術の助手とかいるだろうし。

それにしても生存者の確保にサイコパスの駆除と、最近は余計な仕事が多い。

胸中に巣食った不安はいつ解消できるのか。

13、報告

サイコパス駆除から帰った俺たち防衛メンバーは、小百合さんから間宮についての説明を聞いた。

間宮から色々と聞き出したところ、あの女は自分が放射能に関する研究者であったことやそこから逃げ出してきたことは事実として頑として譲らなかったそうだ。

ただ、一緒にいたという仲間に関しては細かいところをつついていけばボロが出て、実際は仲間などいないというのが正解らしい。電波放送などではなく、研究所でゾンビが発生したから逃げ出して来たのだとか。追いすがってくる仲間を見捨てて何人かでバスに乗って町まで出てきたまではいいが、運転手をしていた人間が間宮たちを囮にして自分だけ逃げてしまったそうだ。なんとか自力でバスを運転しようとしたそうだが、俺たちが見たようにバスは事故って大破。事故の衝撃で短時間だったらしいが気絶している間宮を見捨てて他の連中はとっととどこかへ雲隠れしてしまったというのが実際らしい。なんともはや、屑の集まりだな。

ま、間宮が最初に言ったことはまるっきり嘘だったというわけではないらしい。やっぱり都合の悪いことは隠していたみたいだが。

間宮のいた研究所についても詳しい追及がなされたが、素人にはさっぱり分からない専門用語の羅列で説明されたらしい。噛み砕いて言えば、放射能が人体に及ぼす影響を調べる、ということらしいのだが。被験者もいたらしいのだが、大抵は一年前にゾンビに食われたという話だ。

小百合さんから報告を受ける際についでとばかりに間宮の年齢について疑問に思っていたことを言ってみたが、俺の疑問はあっさりと氷解した。

「それはね、間宮さんが正規の研究員じゃなかったからよ」
「正規じゃない？　研究所にも派遣社員がいたのか？」
俺の言葉に小百合さんは小さく笑った。
「まあ似たようなものかしら。間宮さんは大学院生だったらしいんだけど、インターンシップでその研究所で働いていたそうなの。春休みを利用してね」
「インターンシップっていうと、ただ働きってやつか？」
「まあ、そんな感じね」
小百合さんの言葉によると、本来インターンシップというのは専門的職業、特に医療関係者が就業するために実際の職場で実習をすることだったらしい。しかし最近ではインターンシップの適用される範囲が増え、一般企業でも試験的に学生を受け入れて広告と青田買いを行っていたのだという。研究所などでも早いうちから優秀な学生を囲い込みするために積極的に行っていたのだとか。
間宮がインターンシップでそこにいる間に例のゾンビ大発生が起き、正規の研究員でなかった間宮もたまたま一緒に避難できたというわけだ。
「それで、研究所の場所は把握できたのか？」
吉行さんが尋ねる。彼は間宮の経歴にはさほど興味がないらしい。
小百合さんは残念そうに首を振った。
「住所は分かってるの。ただ、場所が『山』の中なのよ」
その言葉に、防衛メンバーの顔つきが変わった。

それまでは無関心や半信半疑だったのが、強い疑惑の色にとってかわる。
この『家』にいる誰しもが、『山』に超ど級の危険生物がいることは知っている。それが容赦なく人を襲うことも。
「それが事実なら、あの女がここにいるのが奇跡ね」
泉さんがため息をつく。
吉行さんもこめかみを押さえながらため息をついた。
「よしんばその女の言うことが事実なら、俺たちはその研究所へ一度行ってみるべきだ。しかしそいつがでたらめなら、無駄どころか犬死するだけだ。その女の言うことは事実なのか？　『山』から来たなんて」
「そもそも、放射能の研究所に一年もの籠城に耐えうるほどの食料が本当にあったの？」
口を開かないメンバーも、吉行さんたちと似たような考えを持っているのだろう。不信そうな顔で小百合さんを見ている。勿論、俺だって信じられない。
が、
「今から言うことは『家』からの決定事項よ。最後に『山』の情報を得たのは半年前。今でもあの化け物がいるかは分からないわ。だから、明後日よりかねてから打診のあった『導きの森』と協力して、『山』の探索を行います」
嘘、だろ？
一瞬の沈黙の後、部屋の中に怒声が飛び交った。

誰よりも頭に血が上っていたのは、俺だったろう。
俺は感情のままに小百合さんの胸倉をつかんでいた。
「冗談じゃねえよ、小百合さん！　半年前のアレで、何人が死んだと思ってんだ！　あの人が死んだのだって……！」
「決定事項よ」
ぴしゃりと小百合さんが言う。体が一気に冷えて、そして次の瞬間には血液が沸騰するかと思うほどの怒りが沸いた。
「従えるかよ！　安全な『家』を作るのがあの人の理想だったんだ！　なんで軌道に乗ってきたのに壊そうとすんだよ！　それもあんな宗教狂いのバカどもと協力して！？　半年前とおんなじ失敗すんのかよ、あんたたちは！？」
「決まったことよ」
「俺は知らない！　聞いてない！」
「今言ったじゃないの」
「そういう問題じゃねえ！」
俺は知らない。『家』の意思決定は、一部が勝手にしていいものじゃない。まして、こんな命の危険があるのならば。
小百合さんたちに比べればまだまだ俺もガキだろう。
けど、こんな勝手なことってあるかよ！
と、唐突に横から声をかけられた。
「それについては僕から説明しよう」
思わず小百合さんから手を離して声の方へと体を向けた俺だった

が、次の瞬間には衝撃を受け、床と対面することになった。

「とてもとても難しいことだとは思うけれど、少しだけ僕の言うことを大人しく聞いてくれないかな、正也君」

穏やかな声とともに、背中にまわされた腕がひねりあげられる。思わずうめき声が漏れた。

「ずいぶんと横暴だな、彰弘」

吉行さんが険しい声で言う。彰弘さんが苦笑する気配があった。

「どうにも……事態は僕らが思っていたよりも深刻になっているようでね」

そして小さく息をつくと、彰弘さんは言った。

――近いうちに、この『家』が襲撃される、と。

１４、非常事態

――山よ、山に行けばいいわ！　××にはパパの別荘があるの！　観光地じゃないからゾンビだってほとんどいないでしょうし、近くに川も流れているから安心よ！

上手い話には裏がある。

しかし俺たちの『家』だって条件だけで言えば信じられないくらいの好条件のものが見つけられたから、あの女の話にうっかり乗ってしまったのだ。

手痛い失敗は俺たちを『山』には金輪際近付かないと誓わせるには十分だった。

彰弘さんの言葉に防衛メンバーも顔色を変えた。

「どういうことだ、彰弘」

吉行さんが彰弘さんを睨む。俺も全く同意見だ。体中がざわざわ

としているようで、落ち着かない。
俺が話を聞く態勢になったと分かったのか、彰弘さんは俺を解放した。俺はぎこちなく立ち上がる。
「間宮さんの話と、外回りの報告との話を合わせた結果だよ」
そう言って、彰弘さんは鋭い視線を俺に向けた。
「彼女は尾行されていた」
「……誰に？」
泉さんが怪訝そうに彰弘さんを見る。俺も内心で首を傾げた。
小百合さんと彰弘さんは険しい表情を崩さず、小百合さんにいたっては複雑そうな視線を俺に向けてきた。
二人の様子に俺は嫌な予感を覚える。
「もしかして、俺たちが間宮を連れて来た時に？」
「恐らくは」
「……順を追って説明するわ」
小百合さんが頭痛をこらえるようにこめかみに指を当てた。
「外回りからね、生存者について報告があったの」
「間宮以外にか？」
初耳だ。しかし俺以外はそうでもなかったらしく、平然とした様

子だった。ということは、俺が間宮に時間を取られている時に報告があったのか。

「確か男の生存者が真奈丘町の刑務所の連中に保護されたんだろう？　それなら俺達も知ってる」

僅かに苛立たしげに吉行さんが言う。

俺たちの『家』の他にも、生存者が拠点としている場所はある。俺たちの家は『観桜池高校』だが、もう少し東に行けば数十名の生存者が共同生活をしている『真奈丘刑務所』というのがある。

刑務所と言っても柄の悪い連中が集まっているわけではない。刑務所の堅牢さに目をつけた別の生存者グループが活動の拠点にしたのだ。中にいたはずの囚人も看守も極限状態で限界が来ていたのか殺し合っていたため、物騒な生存者は一人としていなかったらしい。

刑務所に住み着いた連中も理性的で堅実な考え方をしていて、この極限状況を平穏に過ごそうとしている。サイコパスのごとく己の欲望に従うのではなく、しっかりとした集団を形成し、ルールを作り、秩序を作った。あちらもゾンビ肉のことは知っていて、それを食っている化け物級の身体能力の持ち主ばかりである。

ただ、向こうには向こうの、こちらにはこちらのルールがあり、それが僅かに相容れないものだった。

うちは『家族』を目指し、向こうは『自律した共同生活』を目指した。あちらからすれば俺たちは馴れ合ってる甘ったれで、こちらからすればあちらは個人主義の冷たい奴ら、だ。

仲良くするなんて到底できない話だが、そこはリーダーとなる人間がどちらとも大人であったために、定期連絡以外はお互いに非干渉の協定を結んでいた。物資の取り合いなんかで縄張り争いから闘

争に発展したら目も当てられない。ゾンビは愚鈍だが、人間は狡猾だ。殺し合いになればタダでは済まない。

とはいえ、何事にも合理的なあちらの連中ならば、間宮と同じ研究所から来た学者先生を上手いこと御することもできるだろう。学者先生の頭が間宮ほど悪くなければ。

彰弘さんはやれやれと言わんばかりに両の手のひらを天井に向けた。

「正しくは、元生存者、だね」

「元？」

学者先生は早くも死んだのか？

防衛メンバー皆が訝しげな顔をした。

そして彰弘さんの告げた言葉は俺の予想を見事に裏切った。

「真奈丘町の刑務所は全滅したよ。生存者は一人もいない」

世界から音が消えた。

15、惨劇

三十匹近いゾンビをぶっ飛ばす化け物を知っている。
ビルの十階から飛び降りてもピンピンしている化け物だって知っている。
サイコパスが降らせる弾丸の雨をくぐりぬけてそいつをぶちのめした化け物だって知っている。

独立独歩を掲げるだけあって、刑務所を根城にする連中はどいつもこいつも不死身と言っても過言でないくらいの強さだった。
ピンチを助けてもらった時もあった。当然のごとく報酬を支払わされたが、命には替えられない。

真奈丘の連中はうちでいうところの彰弘さんや吉行さんレベルの実力者で構成されていたはずだ。単なるゾンビになんて絶対に負けない。武器を持ったサイコパスどもにだって負けるはずがない。

だってのに、全滅だって？

「小百合さん、冗談キツイって」

俺が引きつった顔で笑うと、小百合さんは沈痛な面持ちで首を振った。

「真奈丘の家の皆は全員死んだわ。忠邦さん達が定期連絡に行った時には、運よくのがれていた一人を除いて全員こと切れていたらしいの」
「その一人は今どこに？」
「船でもラクダでも行けない場所に」

彰弘さんが長い脚を組んで机に腰を掛ける。
「ふざけてる場合か、彰弘」
「真面目に考えてたら恐怖で気が狂いそうになるからね」
吉行さんの鋭い声にも、彰弘さんは皮肉っぽい笑みを崩さない。
「四肢がもがれて内臓がはみ出た状態でも辛うじて喋れたんだから大したものだよね。せめて被害が拡大しないためにもと事のあらましを喋って事切れたよ」
彰弘さんの表情がかげる。沈痛な面持ちで彰弘さんは続けた。
「彼らは僕たちと同じように、逃げていた生存者を発見して保護した。三日前の話だ」
「三日前……ってことは、間宮の仲間じゃないのか？」
俺の問いに、彰弘さんは首を振った。
「そうじゃない。その生存者というのは間宮さんたちを囮にして逃げた人間だ。彼は研究者ではなく研究施設の技術者をしていた男でね。電気関係に強かったらしい。多少性格がどうであれ、あちらとしては願ってもない人材だった。適当に口車に乗せて協力を取り付けたみたいだったけど――」

男が来た日の深夜、異変があった。

刑務所の周囲を見回っていた男が、突如何者かに襲われたのだ。

響く怒声と悲鳴、そして異状を告げる警鐘の音。

おりしも分厚い雲が月を隠していた時。明かりがなければ鼻をつままれても分からないほどの濃密な闇が周囲を覆っていた日だった。最低限の明かりはともされていたが、謎の襲撃者は暗闇にまぎれてゲリラのように神出鬼没に攻撃を繰り返す。ゾンビ肉で肉体を強化し、夜目の利く彼らでさえ、襲撃者の残り香を嗅ぎとることしかできなかった。数々の死線をくぐりぬけてきた連中ですら、敵のおぼろげな姿すら確認できなかったのだ。

しかしおめおめとやられっぱなしだったわけではない。

真奈丘の刑務所は俺たちの『家』と決定的に違うところがある。それは武器の所有数だ。

クロスボウなどの飛び道具、武器にもなる工具、銃器、刃物、どこから手に入れたのか手榴弾やら閃光弾やら催涙弾やら。

そういったものを彼らは惜しみなく使った。敵がそれほどに強いと分かっていたからだ。そのときすでに被害者が出ていた。

元々刑務所の守りは堅牢だったが、オーバーキルとも思える攻勢に襲撃者は撤退をした。死体を見つけることは出来なかったが、彼らは別のものを見つけた。

緑がかった体液と、いびつな形をした腕を。

当初は保護した男が何らかの関係を持っていると目されたが、真実は分からずじまいとなった。何しろ、襲撃者によって件の研究所

からやってきた男は殺されていたから。

さらに翌日の夜、刑務所の連中は警戒レベルをマックスまで引き上げていたというのに、再び謎の襲撃者の闖入を許してしまった。

その日襲われたのは人間ではなく、彼らの持つ武器だった。

刑務所の連中は合理的だが慎重だ。膨大な量の武器を常に装備するなんて無駄なことはしなかったし、一か所に集めて保管するなどという馬鹿なこともしなかった。

個人で所有する武器のほかに、予備の武器を保管する武器庫は複数個所存在した。部屋の一室をそのまま武器の保管庫にしているのもあれば、刑務所で以前から使われていた大型金庫に武器を厳重に保管しているのもあった。金庫にしまわれていたのは強力な武器。主に銃火器だったらしい。

真奈丘の連中に限らず、生存者が有している武器はほとんどが金属製だ。よほど保存状況が悪いのでなければ、定期的に手入れさえしておけばある程度はもつ。

しかし彼らが気付いた時にはどの部屋の武器にも緑色の粘液が掛けられていて、どうやらそれが強力な酸だったらしく、腐食した武器は到底仕える状態ではなくなっていたという。

そしてその翌日の未明、刑務所は異形の化け物どもの襲撃を受けたのだった。誰か分かればいいほうで、五体満足の死体は一つとしてなかったらしい。

16、共通点

緑色の体液という言葉に体がこわばるのがわかった。

「音に聞く『山』の化け物と同じだっていうのか？　緑の体液なんて、プレデターでもあるまいし」

吉行さんが眉をひそめながら言う。吉行さんは『山』での惨劇の後にうちに来たから、あの化け物を見たことがないのだろう。

いや、他の人たちだってそうだ。なにしろあの化け物どもを見て生き残ったのは一人しかいない。

「あの『山』の化け物のことは、正也君がよく知ってるでしょう？」

小百合さんが言う。

「調査班の中で唯一『山』から生還した子なんだもの」

血の気が引いていく。手足が冷たい。

襲ってくる化け物、阿鼻叫喚の地獄絵図、八つ裂きにされる仲間――あの人の最期。

あの地獄で死にゆく仲間を見捨てて命からがら逃げ出してきたのは他の誰でもない、俺だった。

――――あの馬鹿女の言う別荘とやらの下見に行った俺とあの人含めて十人のメンバーは、謎の化け物に襲われた。

例の『山』に入ってから日が沈み始めたころだった。

別荘とやらは小奇麗で、物資もそこそこ揃っていた。といっても、それほど大人数が泊るためのものではなかったから、『家』として使うには難しいという結論に至った。その別荘を山の幸を採取しに行く際の休憩所にすればいいということで俺たちは盛り上がった。

実際、人里から離れたその山には当初の予想通りゾンビが見当たらなかった。動物も姿を見せなかったが、それは街中でも同様だったので俺たちは気にしていなかった。

そうして俺たちは悠々とその日の夕食の準備をした。山菜やら川魚、木の実といった山の幸をふんだんに集め、キャンプファイヤーに近い大きな焚き火を囲んでの夕食としゃれこんだのだ。

あのトラブルメーカーの馬鹿女も死ぬ前にいい情報を残してくれたものだと俺たちは笑いあっていた。

まさに俺たちがいる『山』こそが、今までのあのバカ女が起こしてきたトラブルなど目ではない最低の災厄が振りかかる場所だとは知らずに。

唐突に、それまで赤々と燃えていた焚き火が消された。

「おい、誰だよ水かけたやつ。せっかく火ぃつけたってのに」

順一さんが不平を鳴らした次の瞬間、彼の胸から茶色い手が生えた。

噴き出した血が残った火種を消した。

「っ敵だ！　離れろ！　明かりをつけろ！」

あの人の怒声が響く。俺は慌てて焚き火から離れ、電池式のランプを点けた。あちこちで明かりが点される。

浮かび上がったのは既に殺された二人の死体と、化け物としか形容できないものだった。

「ば、化け物……！」

怯えたように誰かが言う。その人が特別臆病だったとか、気が弱かったというわけじゃない。

今までゾンビと戦ってきた俺たちでさえ、その化け物は生理的嫌悪と生理的恐怖を覚える容貌だったのだ。

全長は二メートル以上ありそうな巨体。茶色くぬめった皮膚は黒いまだら模様が浮かんでいる。いびつに曲がり、盛り上がった背中はノートルダムのせむし男を彷彿とさせる。腕はアンバランスに太く、足は異様に短い。顔は肉腫でぼこぼことしており、耳らしきものは見当たらなかった。口が顔の端から端まで裂けており、よだれの垂れるそこからは鋭い牙がのぞいている。ハ虫類じみた目と視線があってしまい、思わず顔が引きつった。

「畜生！」

順一さんと仲のよかった大悟さんが化け物に斬りかかった。彼の得物は日本刀で、日頃からしっかりと手入れされたそれは化け物の腕を切り裂いた。

緑色の液体が化け物の傷口からあふれ出る。化け物が一瞬動きを止めた。
が、直後に日本刀はへし折られ、大悟さんはの首はくの字に曲がり、内臓が引きずり出された。

「遠距離から攻撃しろ！　近づくな！」

あの人の怒声が響く。
遠距離からの攻撃となると手段が限られてくる。当時は吉行さんが来る前だったので、指弾なんていうのを使える人もいなかった。
俺たちは真奈丘の連中ほど強力な武器は有していなかった。それでも何人かは銃を持っていたし、そうでなくとも投げナイフやらボウガンなんてのもあった。俺は原始的にものを投げつけることを選んでいたが。

それまでの俺たちにとって、敵となるのはゾンビかサイコパスだけだった。ゾンビ肉で強化した肉体と知恵、それからある程度の頭数さえそろえば倒せない敵はいなかった。

しかし俺たちの目の前に現れた化け物は、スピード、パワー、頑丈さ、そのどれをとっても規格外だった。銃弾の雨を浴びてももろともしない敵なんて想定していなかった。

「撤退しろ！　絶対に距離を詰められるな！」

怒声が響く間にも、被害者は増えていく。

俺たちはなすすべもなく、逃げるしかなかった。

固まってしまった俺を見かねてか、吉行さんが口を開いた。
「んで？　その化け物の体液やら腕やらってのはあるのか？」
「保存していたらしいんだけど、現物は目を離したすきに何者かに持ち去られてしまったようなのよ」

小百合さんが苦々しげに言う。
それに疑問を呈したのは泉さんだった。

「瀕死の男がよくもまあそこまで喋ったものね？　それにその腕の現物がないのに事実ですって？」
「彼が喋ったのは事件の概要だけだったよ。第二陣がやってくる前に大急ぎで刑務所内を探索して、手掛かりとなるものを探してきたってわけさ」

そういって彰弘さんが血のりがべっとりと付いた手帳を取り出した。

「死体のポケットに入っていたものだ。亡くなった女性が個人的に付けていた日記だったよ」
「……あそこの連中なら、業務日誌の一つや二つ、書いてるんじゃないのか？」

吉行さんが言う。彰弘さんは意味深な視線を返す。

「ああいう人たちだから、絶対に記録は付けているだろうね。起床時間から予定から引き継ぎ事項まで書いた日誌を。でもなかった」

「探し方が悪かったんじゃないのか？」

「かもしれないね。だが、忠邦さんはそういった記録の場所を知っていたそうだよ。その場所を探したらしいが、きれいさっぱりなくなっていたそうだ」

背筋が凍る。デジャブどころじゃない。よく似たことがつい最近なかったか？

「それどころかね、この記録にも書かれている駄目にされた武器というのが一つも残っていないんだよ。きれいさっぱりなくなっていた。それどころか、定期連絡の人が帰ってきてから調査班が向かった時には、真奈丘の刑務所の中には死体一つ残っていなかった。何者かによって見事なまでに掃除されていた」

彰弘さんは俺に視線を向ける。

「ねえ、正也君。バスの衝突現場を綺麗に掃除した連中と、刑務所で起こった惨劇の跡を綺麗に掃除した連中が全くの無関係の人間だと思うかい？」

俺は否定の言葉を口にすることができなかった。

17、山を目指して

市街地から離れるにつれ、俺は体が冷えていく感覚を覚えた。手足が震えそうになる。

二車線あった道路は一車線になり、家よりも田んぼや林の割合が増えてきている。普段はビルに隠れて見えない山々も、すぐ近くに見えている。

間宮のいた研究所は、やはりあの山だった。

脳裏によぎるのはあの化け物だ。

「やっぱり正也君はあっちにつかせた方がよかったんじゃないかな」

先頭近くを歩く彰弘さんが眉をひそめて言う。彰弘さんが言うあっちというのは、妊婦や子供とその警護する人たちのことだ。長時間の移動や戦闘は危険ということで、一時的に警護のしやすい別荘に居を移している。吉行さんや泉さんはそちらだ。

「駄目よ。あの化け物を一番知ってるのは正也君ですもの」

小百合さんがたしなめるように言う。

俺はその言葉に歯を食いしばった。

すでに俺の知っている情報は全員に伝えてある。みんな覚悟もしている。不意を突かれることはあっても、驚いて動けなくなるようなことはないだろう。

だけど、俺は怖い。許されるのならば、今すぐにでも逃げ出したい。

しかしそれをやってしまえば、以前と同じで仲間を見捨てる最低

な腰ぬけ野郎になってしまう。

俺は顔を叩いて気合いを入れると、こちらを心配そうに見ていた彰弘さんに頷いて見せた。彰弘さんは一瞬苦笑したが、すぐに表情を引き締める。

「背中を撃つような真似はくれぐれもしないほしいな、正也君」

「はい、もちろんです」

しっかりと頷くと、彰弘さんは少しだけ笑った。

「よく会話できるわね。独り言みたい」

背中の間宮が薄気味悪そうに言う。俺たちにとっては普通の声量だが、間宮には聞き取れないらしい。

しかし人に背負われて移動しているくせに随分な態度だ。

「あんたの耳が遠すぎるんだよ、お・ば・さ・ん」

「はぁ！？　私がおばさんならあんたはおじさんよ！」

俺の軽口に間宮が眉を逆立てて怒る。この女、マジでうるさいな。耳元で怒鳴るなよ。

山までは距離があるが、下手に車で移動すると音で悟られる上に一網打尽にされる可能性もある。そのため何人かは自転車やスケートボードといった乗り降りが容易な移動手段を使ってはいるものの、三十人いるメンバーのほとんどが徒歩移動だ。

日ごろからあちこちに狩りに出かけたり体を鍛えたりしている俺たちには問題ない距離だが、つい最近までシェルターにこもっていた学者先生には厳しい道のりである。そもそもゾンビ肉を食った俺

たちの移動速度に間宮はついてこれない。仕方がないので俺が間宮を背負って移動しているというわけだ。
ついでに言うなら俺が一番生存率が高いということで、シェルターまでの道を知っている間宮の護衛というかお守りも兼ねている。間宮が死ねば、シェルターの場所が分からくなるからだ。
なにしろ間宮は研究所までの地図を書こうともしなかった。恐らく書いてしまったら自分が用無しとして捨てられると危惧したのだろう。無理もない。間宮に対するうちの連中の風当たりは強い。俺だって優しくするつもりはないし。
ま、地図を書いたとしても間宮は連れて行っていただろう。何しろ間宮が嘘八百を並び立てているかもしれないのだ。騙されて全滅したら洒落にならない。
そういうわけで、俺たちは間宮のナビというとてつもなく頼りないものに従って山を目指しているのだ。

間宮の言っていることは嘘ではないらしく、ところどころに真新しいタイヤ痕が見られた。

「この辺で山科さん――運転してた技術者の人だったんだけど、その人がバスの屋根や窓にしがみ付いてたゾンビを振り払うために、スピードを上げて蛇行運転したの」
「絶叫しながらか？」
「悪い？　しょうがないじゃない、ゾンビがばんばん屋根やガラスを叩いてたのよ」
間宮は俺の肩に指を食い込ませる。その程度じゃちっとも痛くないが、俺は間宮を一瞥するとため息をついた。
「悪いに決まってる。ゾンビは音と臭い、それに感情に反応する。絶叫しながらバスで移動してたらゾンビを集めながら移動するよう

なもんだ。あんたもゾンビに遭遇しても喚くな。平静を保て」
「何言ってるの。音や臭いはともかく、感情？」
いかにも胡散臭そうに間宮が言う。この女、人の言うことにいちいち突っかかってくるのは何なんだ。
俺は内心でイラつきながらも彰弘さんに視線を送った。彰弘さんの出したサインはゴー。教えろということか。
「ヒステリー、怒り、恐怖、そういう興奮状態の人間にはゾンビが寄っていきやすい。セックスしてる連中とかもな」
「それは……声や体臭に反応してるんじゃないの？」
真面目に言っていると気付いたのだろう、間宮は困惑したように言った。俺は首を振る。
「実験した。耳を潰したゾンビと鼻を潰したゾンビ、それから目を潰したゾンビでだ。全部潰した奴でも実験した。どんな感情にも関わらず、興奮状態の人間にゾンビは反応する」
不幸中の幸いとでも言うべきか、実験体となるゾンビは腐るほどいた。
「もしかして、脳波を感知してるのかしら」
間宮が小さな声で呟く。
脳波っていうと、α波とかいうのだったか？　クラッシックを聞くと静かになるとかなんとか。嘘発見機なんかでも使ってた気がするが。
そういや誰かもそんなこと言ってた気もする。誰が言ってたんだっけ？　まあ、どの道脳波なんて言われてもピンとこないのだが。

「かもしれない。ともかく、平静でいりゃ問題ない。俺の背中で大人しくしてる限りは守ってやる。ヒステリーは絶対に起すな。どんなに怖くても叫ぶな。俺の集中力も乱れる。いいな」

俺は首をひねって間宮を睨みつける。間宮は一瞬鼻白んだようだったが、鼻にくしゃりと皺を寄せて頷いた。

そうだ、俺がこの女を守らなきゃいけないんだ。

嫌いとか面倒くさいとか言ってる場合じゃない。今度こそみんなで生き延びるんだ。

山はすぐそばまで迫ってきていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9432r/

その腐肉を食らえ

2011年9月21日22時40分発行